

# 半田山 D16・E9 号墳

2010

(財)浜松市文化振興財団

# 半田山 D16・E9 号墳

2010

(財)浜松市文化振興財団



## 例　言

- 1 本書は、浜松市東区半田山一丁目における半田山D16・E9号墳の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、国立大学法人浜松医科大学構内における動物実験施設および光量子医学研究センターの増築に先立つ発掘調査として、国立大学法人浜松医科大学の委託を受け、浜松市教育委員会の指導(浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が補助執行)のもと、財団法人浜松市文化振興財団が実施した。調査にかかる費用は全額委託者が負担した。
- 3 発掘調査にかかる期間は、以下の通りである。  
試掘調査 平成20年11月19日から平成20年11月20日  
委託期間 平成21年4月10日から平成22年3月10日
- 4 現地調査および整理作業は、安藤憲・小林剛・関根章義が担当し、熊谷洋子が補佐した。
- 5 本書の執筆・編集および写真撮影は関根章義が担当した。
- 6 調査にかかる諸記録および出土遺物は浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が保管している。
- 7 本書で用いる座標値は世界測地系に準拠しており、図中の方位表示は座標北である。レベル高は標高である。
- 8 土層・土器の色調は『標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議局監修)に準拠した。

## 目　次

例言	第Ⅲ章 発掘調査の成果……………	8
第Ⅰ章 調査の概要……………	第1節 D16号墳……………	8
第1節 調査に至る経緯……………	第2節 E9号墳……………	22
第2節 調査の方法……………	第3節 古墳以外の遺構と遺物……………	33
第3節 調査の経過……………	第Ⅳ章 まとめ……………	35
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境……………	写真図版	
第1節 地理的環境……………	報告書抄録	
第2節 歴史的環境……………		

## 挿　表　目　次

表1 半田山C～F古墳群調査歴……………	表3 出土鉄製品観察表……………	40
表2 出土遺物観察表……………	表4 出土玉類観察表……………	40

## 挿 図 目 次

- 第 1 図 半田山古墳群の位置  
第 2 図 三方原古墳群分布図  
第 3 図 半田山 C ~ F 古墳群全体図  
第 4 図 調査区周辺地形図  
第 5 図 D16 号墳墳丘測量図  
第 6 図 D16 号墳周溝・土層断面図  
第 7 図 D16 号墳周溝出土遺物  
第 8 図 D16 号墳周溝・前溝出土遺物  
第 9 図 D16 号墳石室完掘状況  
第 10 図 D16 号墳横穴式石室  
第 11 図 D16 号墳石室遺物出土状況(須恵器)  
第 12 図 D16 号墳石室出土遺物(須恵器)  
第 13 図 D16 号墳石室遺物出土状況(鉄製品)  
第 14 図 D16 号墳石室出土遺物(鉄鏃)  
第 15 図 D16 号墳石室出土遺物(鉄製品・玉類)  
第 16 図 E9 号墳検出遺構・土層断面図  
第 17 図 E9 号墳前溝・周溝遺物出土状況  
第 18 図 E9 号墳前溝出土遺物(1)  
第 19 図 E9 号墳前溝出土遺物(2)  
第 20 図 E9 号墳周溝出土遺物  
第 21 図 E9 号墳横穴式石室  
第 22 図 E9 号墳石室遺物出土状況  
第 23 図 E9 号墳出土遺物(鉄製品・玉類)  
第 24 図 炭窯跡  
第 25 図 炭窯跡・遺構外出土遺物

## 写 真 図 版 目 次

- 図版 1 D16 号墳調査前状況(南西から)  
D16 号墳完掘状況(南から)  
図版 2 D16 号墳西トレンチ盛土(北から)  
D16 号墳東トレンチ周溝(北から)  
図版 3 D16 号墳石室完掘状況 1 (南から)  
D16 号墳石室完掘状況 2 (北から)  
図版 4 D16 号墳石室遺物出土状況 1 (西から)  
D16 号墳石室遺物出土状況 2 (北から)  
図版 5 炭窯検出状況および土層(東から)  
炭窯完掘状況(西から)  
E9 号墳完掘状況(北東から)  
図版 6 E9 号墳前溝土層(北西から)  
E9 号墳周溝土層(南から)  
図版 7 E9 号墳石室完掘状況 1 (南東から)  
E9 号墳石室完掘状況 2 (北西から)  
図版 8 E9 号墳石室遺物出土状況(北東から)  
E9 号墳前溝および周溝遺物出土状況  
(北東から)  
図版 9 E9 号墳前溝遺物出土状況(北から)  
図版 9 E9 号墳周溝遺物出土状況(北西から)  
図版 10 D16 号墳周溝出土遺物(1)  
図版 11 D16 号墳周溝出土遺物(2)  
図版 12 D16 号墳周溝出土遺物(3)・  
前溝出土遺物  
図版 13 D16 号墳石室出土遺物集合  
D16 号墳石室出土遺物  
図版 14 D16 号墳石室出土鉄鏃  
D16 号墳石室出土鉄製品・玉類  
図版 15 E9 号墳出土遺物集合  
E9 号墳前溝出土遺物(1)  
図版 16 E9 号墳前溝出土遺物(2)  
図版 17 E9 号墳前溝出土遺物(3)  
図版 18 E9 号墳前溝出土遺物(4)・  
周溝出土遺物(1)  
図版 19 E9 号墳周溝出土遺物(2)  
図版 20 E9 号墳周溝出土遺物(3),  
炭窯跡・包含層出土遺物  
E9 号墳出土鉄製品・玉類

## 第Ⅰ章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

三方原台地の縁辺部には総数500基を超える三方原古墳群が造られており、今回調査を行った半田山D16・E9号墳はその中の一支群である半田山C・D・E・F古墳群（以下、半田山C～F古墳群）に含まれている。この半田山C～F古墳群が位置する場所は、現在の国立大学法人浜松医科大学（以下、浜松医科大学）の構内となっており、大学建設に伴い多くの古墳が調査され消滅したが、一部の古墳は構内に緑地として保存され、現在も墳丘が確認できる。

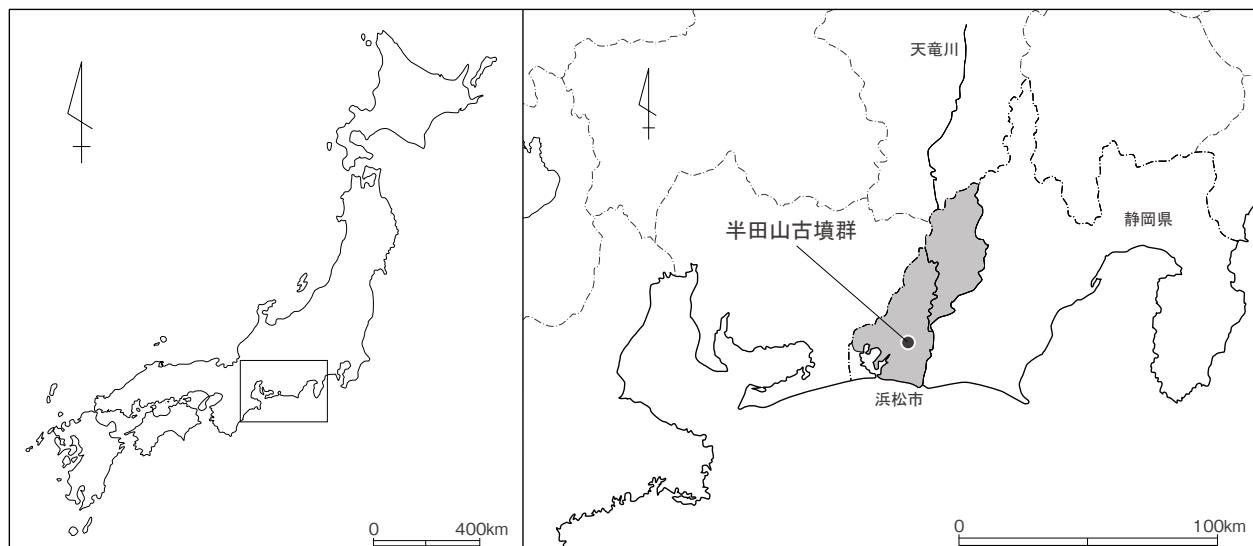
今回の発掘調査は、浜松医科大学が動物実験施設と光量子医学研究センターの増築を実施することになったため、その建設予定地内に存在する古墳を対象として行われた。建設予定地内には、1975年と1999年の調査により、古墳の存在が推定されていたため、現状での古墳の実態を把握する目的で2008年に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、D16号墳では、墳丘の高まりや周溝・埋葬施設が良好な状態で保存されていることがわかり、およそその規模や築造時期を推定することができた。E9号墳では、墳丘はすでに削平され駐車場となっていたが、1999年に確認された周溝または前溝の続きが検出されたため、建設予定地に埋葬施設が遺存している可能性が高いことがわかった。そのため、浜松医科大学と協議を行い、D16号墳は建設予定地と墳丘がおよぶ範囲について、E9号墳は建設予定地内全域について本発掘調査を実施することにした。

### 第2節 調査の方法

今回の調査区は、動物実験施設の増築予定地内を対象地としたD16号墳と、光量子医学研究センターの増築予定地を対象地としたE9号墳に分かれている。両調査区の面積は、併せて約643m<sup>2</sup>になる。

調査を開始するに当たり、各調査区周辺に併せて6箇所の任意の基準点を設置した。その基準点の座標値は、業者に委託して、世界測地系座標と標高値を求めた。遺構等の測量はそれら6箇所の基準点をもとに行った。

D16号墳の調査区は、ほぼ全域が厚さ10cm程度の表土で覆われていたが、一部は道路でアスファルトと縁石に覆われていた。そのため、まずバックフォーでアスファルトと縁石を除去し、その後、調査区を覆う表土層を除去した。しかしながら、D16号墳は墳丘が残っている古墳であるため、墳丘の表土層は手掘りとし、墳丘外の表土層についてはバックフォーで除去した。その際、バックフォーのバケットには平爪を装着して掘削を行った。



第1図 半田山古墳群の位置

墳丘外の表土層掘削後は、墳丘上の表土層および墳丘の流出土を人力で掘削し、周溝と前溝の検出を行った。また、墳丘の構築状況と主体部の位置を確認するため4方向にトレンチを設定した。さらに、周溝の位置を確認するため南東方向と南西方向にもトレンチを設定し、周溝の検出に努めた。主体部検出後は、サブトレンチを主体部に直交するように設定し、床面の確認後は全体を慎重に掘削した。出土した遺物は状況に応じて出土状態図を作成し取り上げた。なお、主体部を掘削した際の排土は、遺物が出土した段階から保管して持ち帰り、遺物が含まれていないか再度確認した。

E9号墳の調査区は、その大部分が駐車場であったため、アスファルトで覆われていた。そのため、まずアスファルトを除去した後、後世の盛土と旧耕作土をバックフォーで掘削した。その際、バックフォーのバケットには平爪を装着し、慎重に掘削を行った。

盛土と耕作土の除去後は人力で遺構の検出を行った。遺構検出後はそれを掘削し、出土した遺物は状況に応じて出土状態図を作成し取り上げた。主体部を検出した後は、D16号墳と同様に、主体部に直交するサブトレンチを設定して、床面を確認した。主体部の平面形と深さを確認した後、全体を慎重に掘削した。出土した遺物は出土状態図を作成して取り上げた。

また、両古墳の平面図は、設定した基準点を基にトータルステーションを用いて、縮尺20分の1で作成した。土層断面図についても、基準点の水準を基に縮尺20分の1で作成した。

主体部の測量は、まず中心軸とその軸にのる奥壁寄りの基準点を設定し、それを基にして1m角に碁盤目状に水糸を張ることで実施した。主体部の測量用基準点については、世界測地系座標を求め、墳丘平面図と合成できるようにした。なお、主体部に関する図面は縮尺10分の1で作成した。

今回の調査では、写真撮影は主に6×7判カメラを用い、モノクロとカラーリバーサルのフィルムを使用した。カラーリバーサルフィルムは35mm判カメラでの撮影も行い、併せてデジタル一眼レフカメラでの撮影も行った。高所からの撮影にはローリングタワー2段を使用した。

調査で出土した遺物の洗浄や注記などの整理作業については、一部を現地調査の段階から並行して行った。本格的な整理作業は現地調査が終了してから、浜松市西区神原町の浜松市埋蔵文化財調査事務所で行った。出土遺物については復元・実測・写真撮影、図面等の記録類は編集・トレースを行い、それらを基に原稿を執筆し、発掘調査報告書を作成した。なお、調査の諸記録および出土遺物については、浜松市埋蔵文化財調査事務所にて保管をしている。

### 第3節 調査の経過

#### 試掘調査

試掘調査は、平成20年11月19日～20日に行い、建設予定地内に幅1mの試掘トレンチを6箇所設定して実施した。試掘トレンチの掘削は、表土層をバックフォーで行った後、人力で行った。掘削後は遺構・遺物の有無や土層の堆積状況を確認した。さらに、D16号墳については、調査前の墳丘測量図も作成した。調査終了後は掘削土を流用して埋め戻し、旧状に戻した。

#### 現地調査

- 5月 8日(金) 現地事務所の設営を行い、調査機材を搬入した。
- 5月 11日(月) D16号墳の墳丘および調査区内の清掃を行い、昨年度の試掘トレンチの位置を確認した。
- 5月 12日(火) 墳丘の現状を撮影し、撮影後に試掘トレンチを基準にトレンチを設定し、掘削を開始した。
- 5月 14日(木) 調査区の北東側から表土掘削を開始した。また、トレンチ内で主体部の堀方を検出した。
- 5月 19日(火) 墳丘南東側に周溝と前溝の検出のためトレンチを設定し、掘削を行った。
- 5月 20日(水) 墳丘の東側半分で周溝の検出を行い、掘削を開始した。また、墳丘南西側で周溝の検出のた

- めトレンチを設定し、掘削を行った。
- 5月 21日(木) 墳丘の西側半分で周溝の検出を行い、掘削を開始した。
- 5月 29日(金) 南東側の周溝上面で検出した炭窯跡が調査区の外に延びることから、調査区の一部を拡張した。また、トレンチの土層断面図を作成した。
- 6月 1日(月) 主体部を検出するため、トレンチ内で検出した掘方を参考にして墳丘の掘削を行った。また、炭窯跡の掘削も開始した。
- 6月 3日(水) 検出した主体部の掘削を開始した。主体部の堀方は羨道部で一段くびれることが判明した。
- 6月 4日(木) 炭窯跡の完掘状況の写真撮影を行い、撮影後に南東側の周溝を掘削した。主体部は、盜掘を受け石室に使われた石材はほとんどが抜き取られていたが、側壁の基底石や床石は比較的良好に残っており、一部では側壁の二段目まで残存していた。また、羨道部の石積みも一部残つており、石室の形態が擬似両袖式であることが判明した。
- 6月 8日(月) 南東側の周溝を完掘し、前溝の掘削を行った。また、主体部では玄室の床面で須恵器や鉄製品、玉類が出土した。鉄製品は鉄鏃がまとまって出土した。
- 6月 9日(火) 主体部の石積みや遺物出土状態および周溝の完掘状況の写真撮影を行った。
- 6月 10日(水) 主体部の実測作業に入ったが、梅雨入りの影響により終日作業することはできなかった。
- 6月 15日(月) 墳丘東側の盛土の掘削を開始した。墳丘西側は開発が及ばないことから、盛土の掘削を行わず、保存することとなった。
- 6月 16日(火) 主体部の実測作業を終了させ、床面に残っていた基底石や床石を取り除き完掘した。
- 6月 18日(木) 調査区内の清掃を行い、調査区全体と主体部の完掘状況の写真撮影を行った。  
D16号墳の写真撮影終了後、E9号墳周辺の草刈りを行った。
- 6月 19日(金) 調査区および主体部の完掘状況を実測し、D16号墳の調査を終了した。
- 6月 26日(金) D16号墳周辺の地形測量とD8・9号墳の測量を行った。
- 6月 29日(月) D16号墳および調査区内の埋め戻しを行った。
- 6月 30日(火) E9号墳と調査区内にかかる駐車場部分を覆っているアスファルトを除去した。
- 7月 1日(水) 調査区の表土掘削を行い、調査区の半分まで掘削を終了させた。
- 7月 3日(金) 調査区の残り半分の表土掘削を行った。併行して遺構検出を行い、E9号墳の主体部および周溝の一部を検出した。
- 7月 7日(火) 主体部の検出は終了したが、雨のため周溝の検出まではできなかった。主体部は検出が終わったため掘削を開始した。主体部は盜掘を受けており、使われていた石材はほとんど抜き取られていたが、側壁の一部が残存しており、側壁には角礫が使用されていることがわかった。
- 7月 8日(水) 主体部の掘削を行い、奥壁側で鉄製品が出土した。また、周溝の検出を終了させたが、雨のため掘削までには至らなかった。
- 7月 9日(木) 周溝の掘削を開始し、前溝から周溝にかけて遺物が多数出土した。また、4名の中学生が職場体験に訪れ、一緒に作業した。
- 7月 13日(月) 周溝の掘削がほぼ終了したところで、前溝から周溝にかけて出土していた遺物の写真撮影を行った。
- 7月 14日(火) 主体部および周溝出土遺物の実測を行った。
- 7月 16日(木) 完掘状況の写真撮影のため、調査区内の清掃を行った。
- 7月 23日(木) 雨のため一週間延期していたが、E9号墳の完掘状況の写真撮影を行った。その後、調査

区および主体部の完掘状況を実測し、E9号墳の調査を終了した。

7月27日(月) 調査機材および出土品を浜松市埋蔵文化財調査事務所に搬入し、現地から撤収した。

また、プレハブの撤去は30日に行った。

### 整理作業

整理作業は現地調査中から浜松市埋蔵文化財調査事務所で行った。D16号墳の出土遺物は、現地調査期間中に洗浄・注記・接合作業までを終了した。E9号墳の出土遺物は、注記作業までを現地調査期間中に終了させ、7月下旬から接合作業に入り、8月中旬までに作業を終えた。

接合作業が終了した遺物から実測作業に取り掛かり、8月下旬までに終了した。さらに、D16号墳とE9号墳から出土した鉄製品の整理作業は、6月下旬から洗浄・錆落としを開始し、8月上旬には接合作業に入った。鉄製品の実測は8月下旬までに終了した。なお、出土した鉄製品の整理作業は川江秀孝氏に御協力いただいた。

また、調査終了後これらの作業と併行して、現地で作成した図面の整理作業を行った。遺構図版の製図作業は8月上旬から開始し、9月下旬までに終了させた。遺物図版の製図作業は8月下旬から開始し、9月中旬までに終了した。さらに、8月下旬からは図化した遺物の復元作業を行い、10月下旬には終了した。その後、11月上旬に遺物の写真撮影を行った。そして、報告書の原稿執筆を調査終了後から開始し、10月から本格的に進めた。11月上旬からは図版類と併せて編集し、3月上旬に本報告書を刊行した。

## 第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

今回調査した半田山D16・E9号墳は、浜松市東区半田山一丁目に所在し、浜松医科大学がある三方原台地縁辺部の河岸段丘上に立地している。

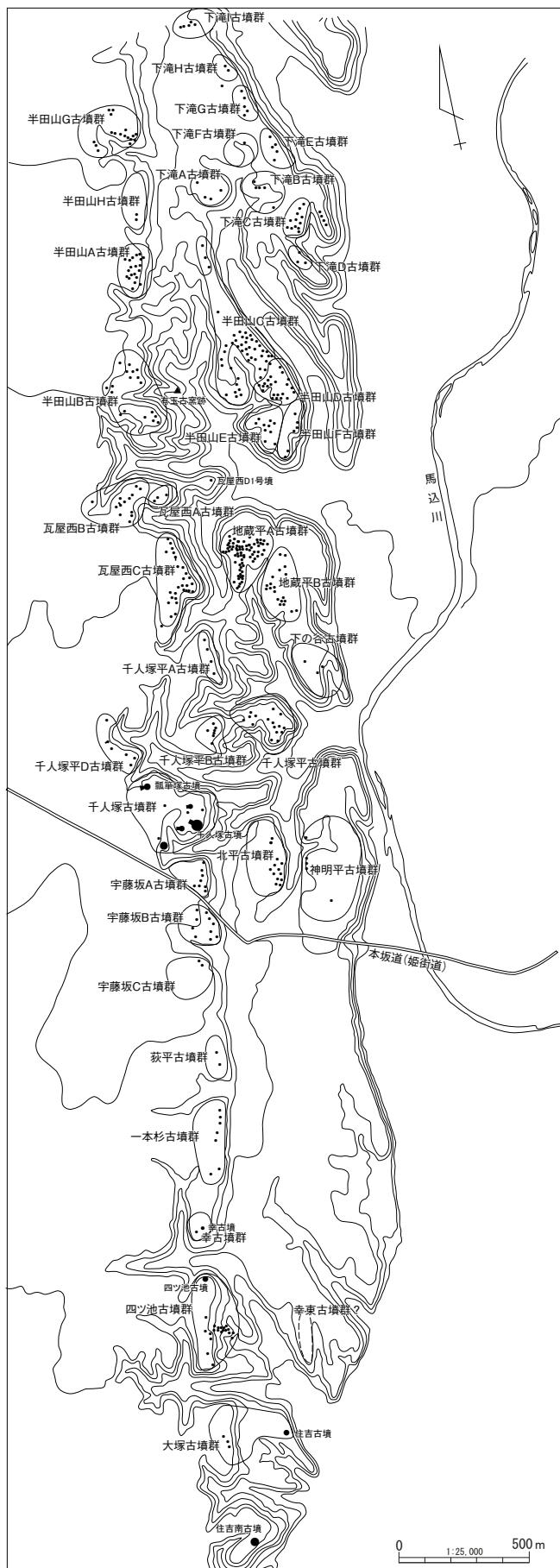
三方原台地は、天竜川の堆積により形成された台地であり、東には天竜川が流れ、天竜川沖積平野と接している。台地の縁辺部は、天竜川やその支流により浸食され河岸段丘となっている。河岸段丘は上から三方原面(台地面)、富岡面(高位)、姥ヶ谷面(低位)、浜北面(最低位)と呼ばれ、調査した古墳は姥ヶ谷面に立地している。これら段丘の縁辺部は、天竜川やその支流の浸食により、至る所で小規模な開析谷が形成されている。そのため、複雑な地形をなしており、入り組んだ丘陵がいくつも見られる。古墳の多くはその丘陵上に築造され、丘陵毎に古墳群を形成している(第2図)。半田山C～F古墳群もその丘陵の一つに形成されている。

半田山C～F古墳群が立地するのは、東を大池、西を西ノ谷、南を藤九郎谷に囲まれた丘陵上である(第3図)。D16・E9号墳は、半田山C～F古墳群が位置する丘陵の南側付近で、西ノ谷から延びる谷によりくびれた尾根上に立地している(第3図、第4図)。

### 第2節 歴史的環境

三方原台地の縁辺部は、多数の古墳が築かれた地域であり、特に古墳時代後期には大規模な古墳群が形成された。その中で、台地の縁辺部に南北約6kmにわたり古墳が築かれたのが三方原古墳群である(第2図)。三方原古墳群は総数500基を超える古墳群であり、丘陵ごとに群集墳が形成され、古墳時代中期から終末期に至るまで古墳が連綿と造られ続けた。半田山C～F古墳群もその中の群集墳の一つである。

三方原台地で最初に古墳が造られるのが、赤門上古墳である。赤門上古墳は古墳時代前期の前方後円墳で、三角縁神獣鏡や銅鏡、鉄製品などが出土していることから、大和政権との強いつながりがうかがえる。



第2図 三方原古墳群分布図

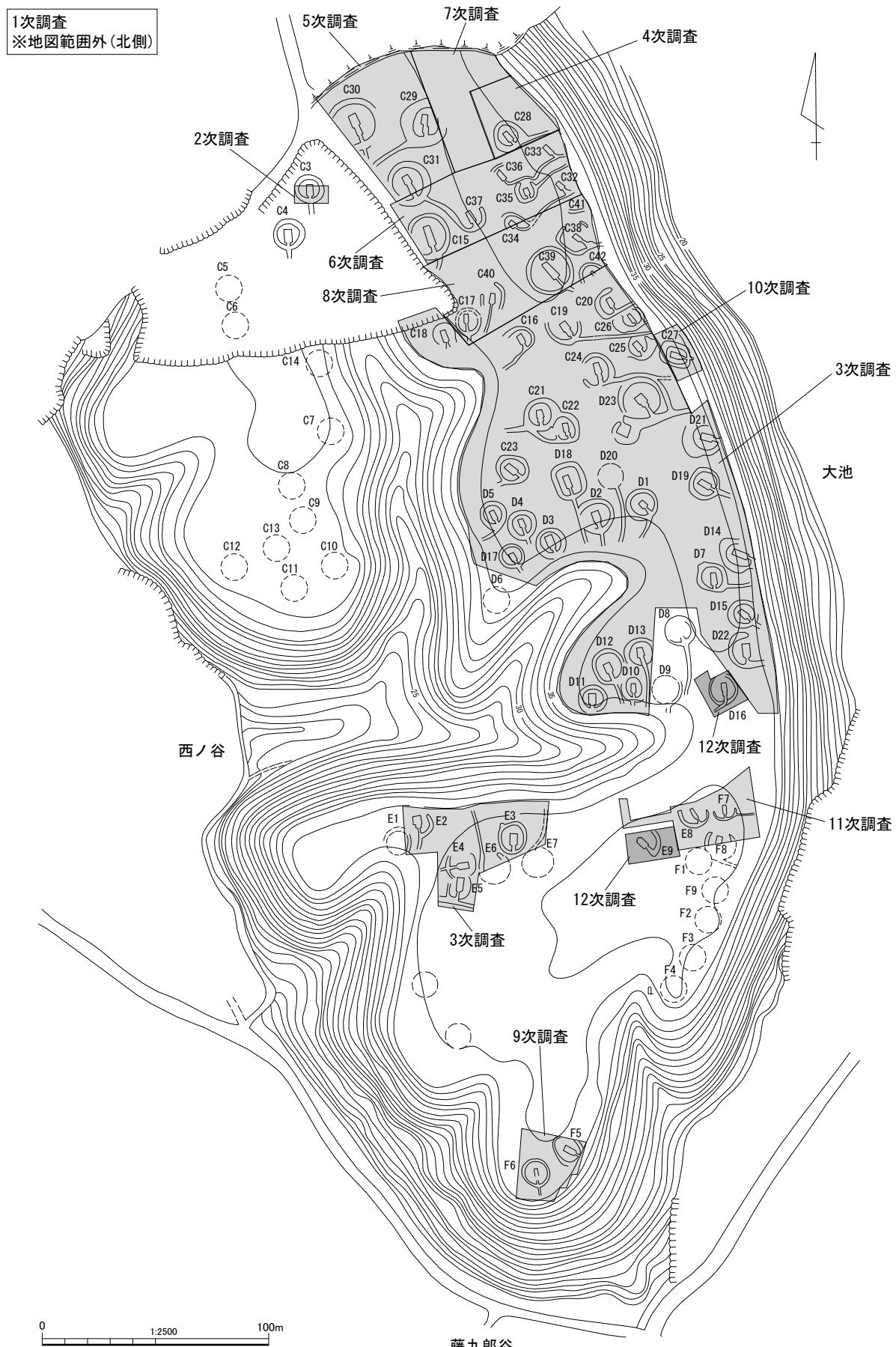
そのため、天竜川左岸地域の首長墓と捉えられる。三方原古墳群の北側に形成される内野古墳群は、赤門上古墳を含み、古墳時代後期に至るまで大規模な古墳群を形成する。

古墳時代中期になると、三方原古墳群が形成され始め、古墳群のほぼ中央に、規模の大きな円墳である千人塚古墳(直径 49m)が築造される。その他、千人塚古墳よりも規模の小さい円墳であるが、同時期に古墳群の南側の地域で幸古墳、四ツ池古墳、住吉古墳、住吉南古墳が築造される。これらの古墳は独立した丘陵ごとに築かれ、複数の有力者層が勃興したと見られる。

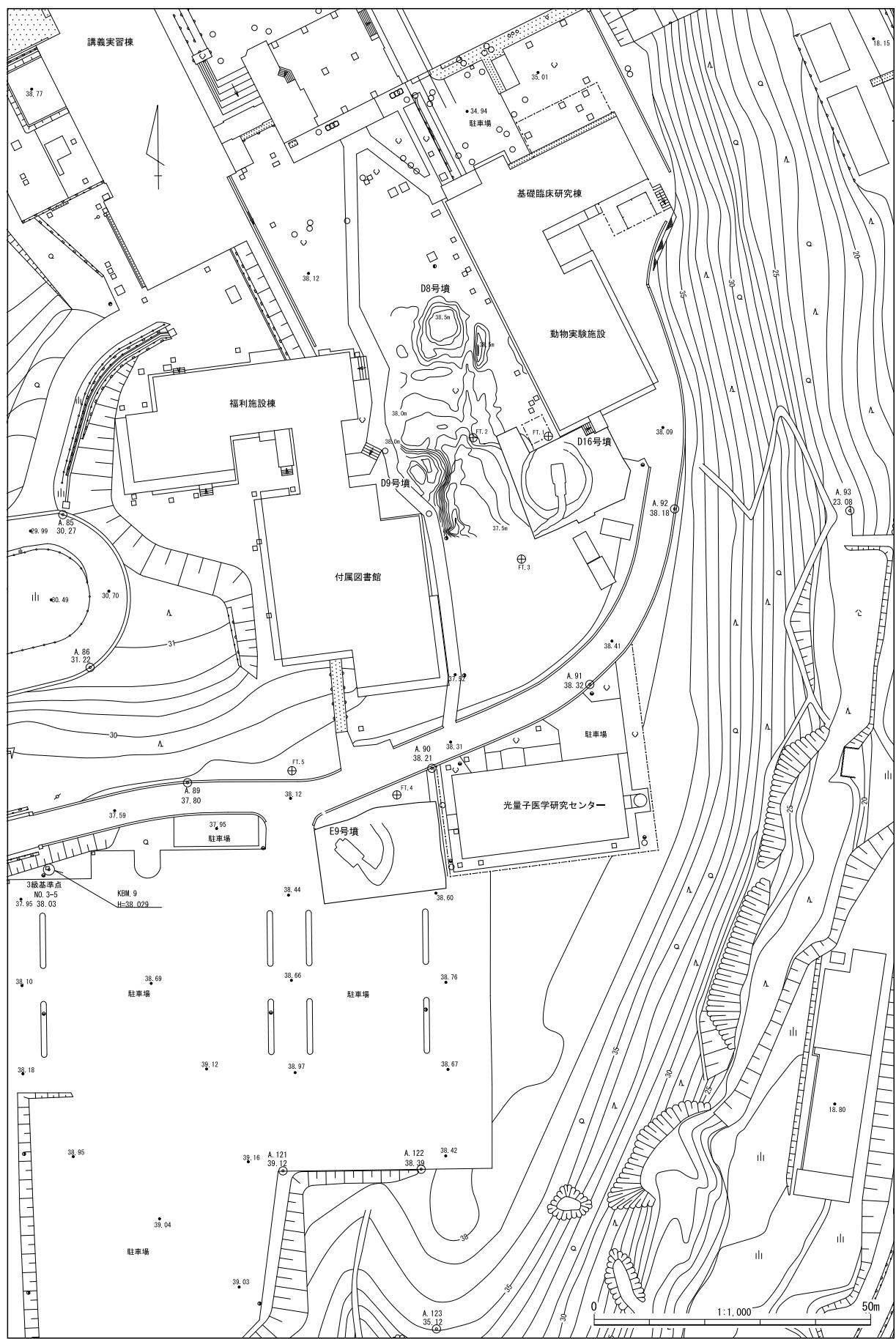
古墳時代後期になると、丘陵ごとに数基から数十基単位の群集墳が形成される。三方原古墳群では、6世紀前半に、瓦屋西 B 古墳群や瓦屋西 C 古墳群で、小型の前方後円墳を中心とする群集墳が形成される。6世紀後半～7世紀前半には、直径 10m 程度の小規模な円墳で構成される群集墳が増加する。この時期の代表的な群集墳には、規模の大きな円墳で構成される、宇藤坂古墳群がある。この時期には、埋葬施設に横穴式石室が導入され、片袖式の横穴式石室が採用される宇藤坂古墳群は、優位な群集墳であったことがうかがえる。半田山 C ~ F 古墳群もこの時期に造営され、これまでに、前方後円墳を含む、83基の古墳が確認されている(第3図)。

三方原台地では、7世紀後半～8世紀になると古墳の築造が減少し、三方原古墳群での古墳の造営が終了する。また、7世紀になると横穴式土壙と呼ばれる新たな埋葬施設が出現する。横穴式土壙は、四ツ池古墳群や瓦屋西古墳群などで検出されており、横穴式石室を有する古墳に従属する階層の墳墓と考えられている。

その他、三方原古墳群内には、半田山 C ~ F 古墳群の西側に、古墳へ供給する須恵器を生産した有玉窯跡が造られる。6世紀前半に生産を開始する有玉窯跡は、湖西窯跡群が盛行するまでの短期間ではあるが、三方原台地の古墳群に須恵器を供給する。



第3図 半田山C～F古墳群全体図



第4図 調査区周辺地形図

### 第Ⅲ章 発掘調査の成果

#### 第1節 D16号墳

(1) 墳丘の状況(第5図～第8図、図版1・2)

##### 1. 調査前の墳丘(第5図上)

D16号墳は、浜松医科大学構内の動物実験施設南側に位置し(第4図)、3次調査の際に建設予定地から外れるため、保存された古墳である。また、周囲には同じように保存された古墳が存在し、北西にD8号墳、西にD9号墳が現在も残されている(第4図)。どちらの古墳も墳丘の高まりは残っているが、墳頂部には大きく盗掘坑が開いている。

調査前のD16号墳は、墳丘の高まりが比較的良好に残っており、墳丘西側で約50cmの比高差が確認できた。墳頂部には盗掘坑があり、石室の天井石や奥壁に使われていたと見られる角礫の破片が落ちていた。また、調査区の南側では、後世の地境溝と見られる窪みが残っている。

##### 2. 墳丘(第5図下、第6図、第7図1)

D16号墳の墳丘は、遺存状態が良好であったため、東西方向と南北方向にトレンチを設定し、周溝や主体部の位置、墳丘の構築状況の確認を行った。トレンチは試掘調査のトレンチを拡張して設定した。さらに、南東方向と南西方向にも周溝を確認する目的でトレンチを設定した。

調査の結果、北側は後世の搅乱により盛土が削り取られていたが、墳形は円墳で、規模は、地山を削り出した基底部で、直径11.7mあることがわかった。墳丘の高さは最も高い所で38.37mあり、基底部との比高差は0.8～1.0mある。また、墳丘の各所に3次調査のトレンチ(旧トレンチ)を5箇所確認した。

墳丘の構築状況は、トレンチ断面の観察から、旧表土を整地せずにその上から盛土をして構築されていることがわかった。盛土は大きく分けて、地山に由来する黄褐色系の粘質土と旧表土に由来する褐色系の粘質土があり、主体部に近い側ではそれらを交互に盛土している状況が見られる。また、宇藤坂古墳群や四ツ池古墳群で検出されている区画帯は確認できなかったが、段階的に墳丘を構築している状況が見て取れる。

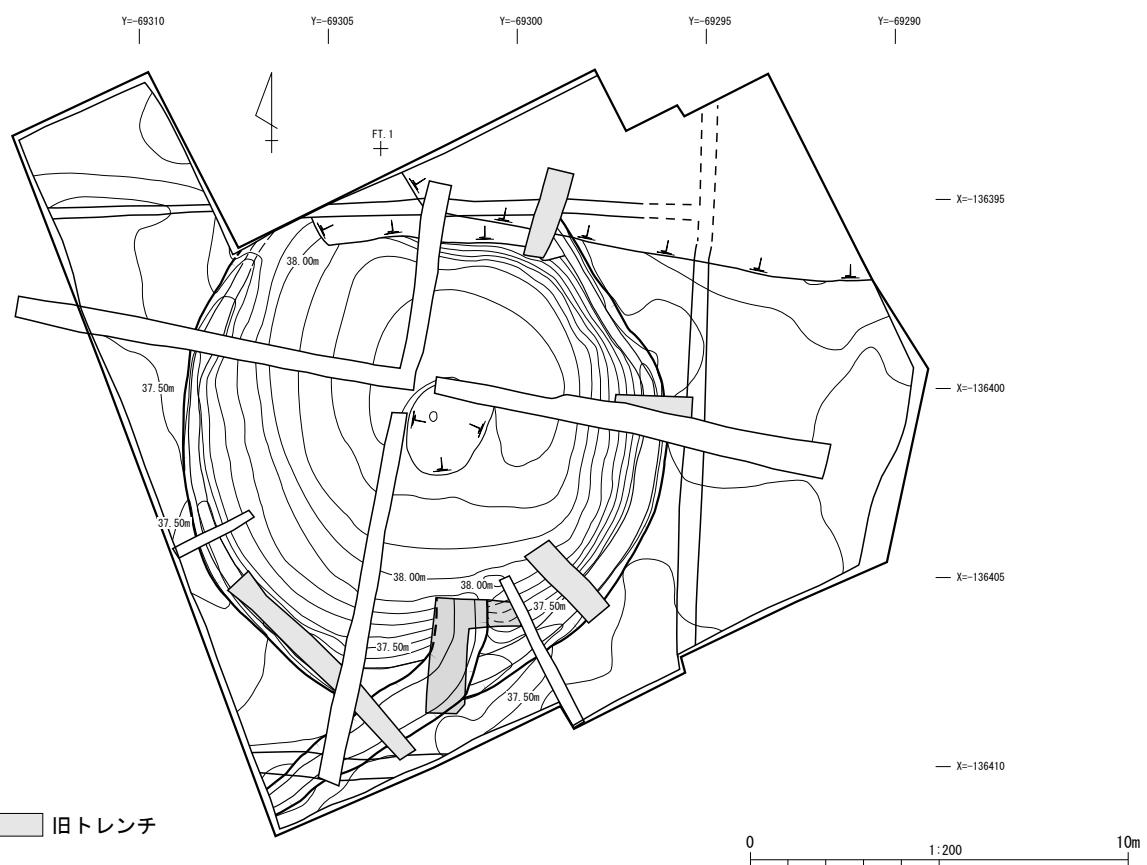
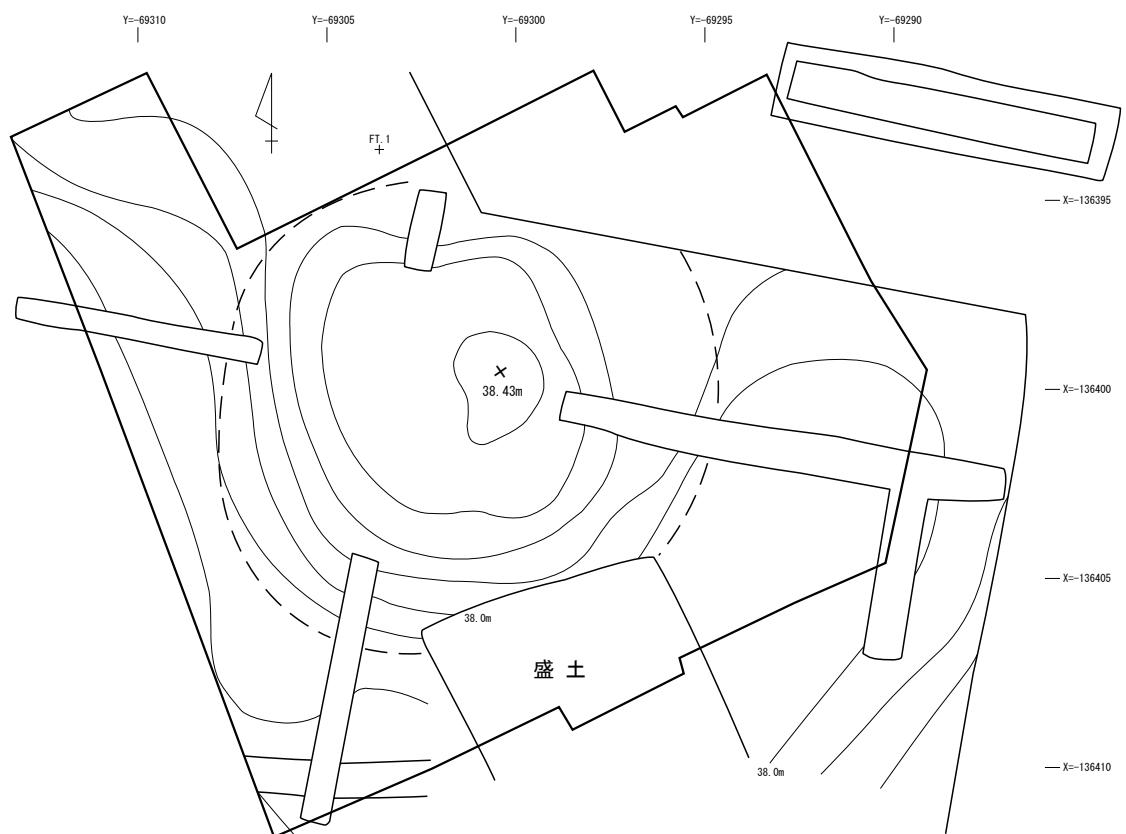
遺物の出土は、南東トレンチやそのすぐ東側にある旧トレンチの上部で須恵器が数点出土しており、壺蓋の第7図1を図示した。図示した1は周溝で出土した須恵器と接合することから、墳丘上から周溝に落ちてしまった須恵器が他にもあると見られる。そのため、今回の調査では確認できなかったが、墳丘上に複数の須恵器が置かれていた可能性を示唆している。さらに、墳丘上で出土した須恵器はすべて破片であり、詳細は不明であるが、古墳にかかる祭祀が行われた可能性も考えられる。

また、調査区の北・東・南側では、後世の地境溝が墳丘を取り囲むように検出され、北側の地境溝は墳丘の一部を削平している。

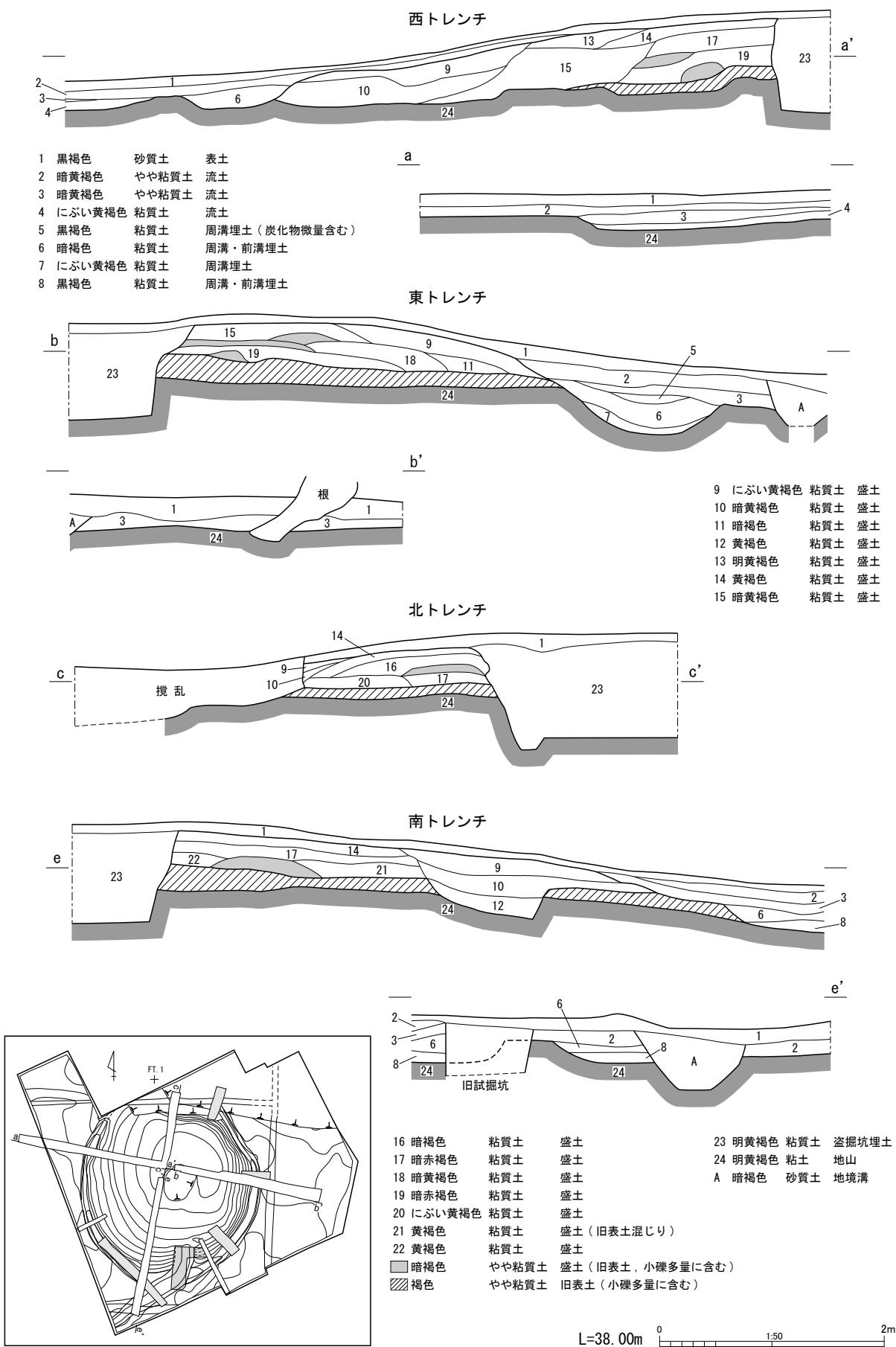
##### 3. 周溝・前溝(第5図下、第6図、第7図2～23、第8図)

D16号墳の周溝は、北側が搅乱のため不明であるが、墳丘の周囲を一周していたと見られる。周溝は東側が深く掘削され、幅1.5m、深さ0.4mとなる。西側は明瞭な掘削が見られず、幅1.0m、深さ0.2mとなる。さらに北西側では、旧表土の掘削が見られず埋土も地山と判別がつきにくうことから、検出は難しかった。周溝内には暗褐色粘質土が堆積しており、南トレンチでは暗褐色粘質土の下に黒褐色粘質土が見られた。

周溝から出土する遺物は須恵器が多く、その他の遺物は土師器の小破片が若干出土しただけである。遺物の出土は南側で多く、特に南東トレンチ周辺の埋土からの出土がほとんどで、いずれも底面から浮いた状態で出土している。さらに、遺物は破片が多く、完形での出土はほとんど見られなかつたが、接合すると完形に復元できるものが多かつた。図示した第7図2～23、第8図24はすべて周溝の南東側で出土した須恵器である。それ以外の場所では、須恵器の破片だけで、図示できる遺物は出土しなかつた。



第5図 D16号墳墳丘測量図



第6図 D16号墳墳丘土層断面図

周溝出土の須恵器は壊身や壊蓋が多く、高壊や壺・瓶類は少量であった。また、図示はできなかったが、甕の破片が南西トレンチ周辺だけで出土しており、場所によって出土する器種に若干の違いが見られた。

前溝は墳丘の南側で検出し、南西方向にある谷に向かって延びている。今回の調査の前に一部は掘削されており、旧トレンチの埋め戻し土を除去したところ検出できた。前溝は、幅0.7～1.4mで、谷に向かって細くなり、深さは周溝の底面より20cm程度深くなる。埋土は、石室の入り口付近では褐色粘質土が堆積しており、南トレンチの断面では暗褐色粘質土と黒褐色粘質土の堆積が見られた。また、石室入り口付近では、閉塞石に使われたと見られる円礫が多数混入していたが、いずれも浮いた状態で向きも揃っておらず、元位置を保っているものはなかった。

出土した遺物は須恵器が多く、周溝と交差する地点に集中し、いずれも底面からは浮いた状態で出土している。須恵器は破片が多く、周溝出土のものと多くが接合するため、元の位置が前溝と周溝のどちらであったかを判断するのは難しかった。そのため、破片の多くが前溝で出土している第8図25・26を前溝出土と判断した。

#### 4. 出土遺物(第7図、第8図、図版10～12)

第7図1は墳丘上から出土した壊蓋である。半球状の断面形で、天井部と口縁部の境界を沈線状にへこませ、天井部外面をヘラケズリする。遠江須恵器編年のⅢ期末葉～Ⅳ期前半のものと考えられる。

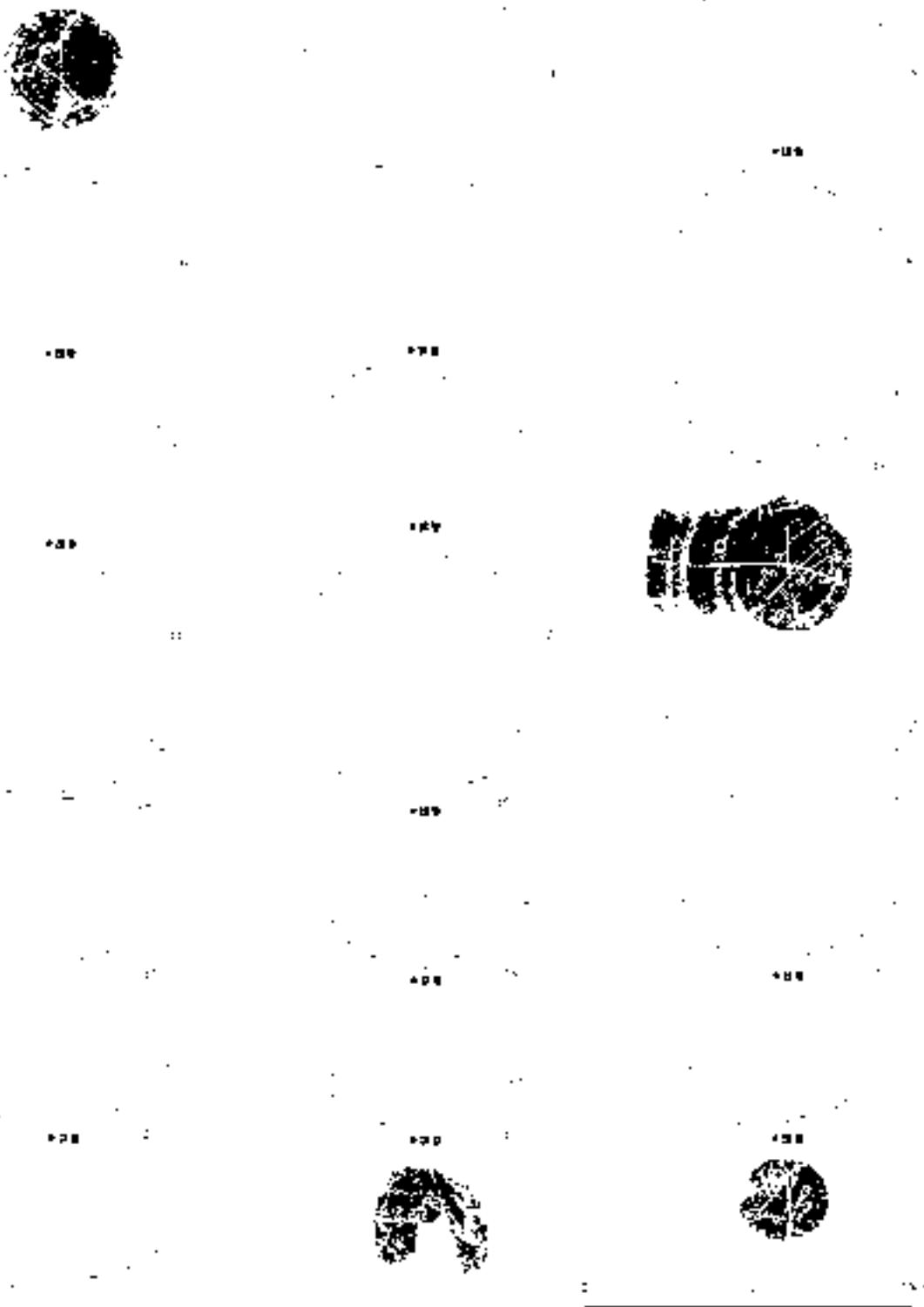
第7図2～12は周溝から出土した壊蓋である。断面形がかまぼこ状となる器形で、口径が10cm台で器高が4cm台の2・4・5・7と口径が9cm台で器高が3cm台の9～11、法量は前者とほぼ同じで器形が円錐状となる3・6・8・12に分けられる。断面形がかまぼこ状で、法量が大きいグループは、口縁部と天井部の境界に弱い沈線が入り天井部をヘラケズリするものが多いが、法量の小さいグループは、天井部の周囲だけ調整され中心は未調整のものが多い。また、6の天井部には「×」のヘラ記号が施される。いずれもⅢ期末葉～Ⅳ期前半の時期と考えられる。

第7図13～23は周溝から出土した壊身である。器径が10cm台となる14・15・17～23と、器径が11cm以上となる13・16に分けられる。法量の小さいものは底部の調整を行わないものが多い。また、13・21・22の底部にはヘラ記号が施され、いずれも「×」と1本もしくは複数の直線を組み合わせて構成している。時期は、前者がⅢ期末葉、後者がⅣ期前半と考えられる。

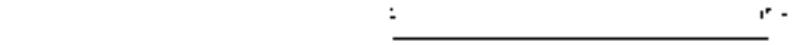
第8図24は周溝から出土した短脚高壊である。壊部の形態は碗形で、外反する口縁部を持つ。体部中位には沈線が見られ、下半はヘラケズリされる。脚部は極端に短く、透かしは見られない。この高壊は、半球形壊部を持つ高壊の脚部が短くなったものと見られ、壊部の特徴を比較すると、Ⅳ期前半以降のものと考えられる。

第8図25・26は前溝から出土した須恵器である。25は小型の広口壺で、器形は肩部が丸みを帯びて全体的に球形となり、肩部の下には沈線が巡る。口縁端部は上方につまみ上げられ、外面側もナデにより段がつくられるため、断面形がT字状になる。底部は平底であるが、他に比べて器壁が肉厚となる。26はフラスコ形瓶である。口縁部は、端部が内側につまみ上げられ断面が三角形となり、口縁部の直下には段を持ち、二重口縁状になる。頸部は体部に比べ短く、体部の高さとの比がおよそ1:2となる。体部の器形は球形であるが、若干上下に潰れているため俵形に近い形状となる。外面の調整は、閉塞した側でカキメ、その反対側ではヘラケズリが見られる。また、口縁部から体部上半には自然釉がかかる。このフラスコ形瓶の時期は、その特徴からⅢ期末葉～Ⅳ期前半頃のものと見られる。

D16号墳の周溝および前溝から出土した須恵器には、時期的な差はあまり見られず、いずれもⅢ期末葉からⅣ期前半におさまる遺物である。そのため、一度に廃棄された遺物である可能性が高く、古墳への追葬は行われなかつたのではないかと考えられる。



第7図 D16号墳周溝出土遺物



第8図 D16号墳周溝・前溝出土遺物

(2)埋葬施設の状況(第9図～第15図、図版3・4)

#### 1. 横穴式石室(第9図、第10図)

D16号墳の埋葬施設は、横穴式石室であることがわかった。石室の天井石や奥壁は後世に抜き取られ残っていなかったが、側壁の基底石と2段目の一部が残っていた。

石室の墓壙は、古墳築造時の表土(旧表土)から掘り込まれており、明黄褐色粘質土が堆積していたことから検出は容易であった。そのため、トレンチを地山まで掘り下げる過程で、一部を検出することができた。また、墓壙の埋土には、石室に使われていたと見られる円礫や角礫の破片が浮いた状態で検出された。

墓壙の形態は、羨道部で一段くびれる形態になる。墓壙の規模は、全長5.75m、玄室部の長さ3.45m、幅2.3～2.4m、羨道部の長さ2.3m、幅1.85mとなる。深さは旧表土から約0.5mあり、側壁よりも外側では若干浅くなっている。

石室の形態は、残っている側壁と抜き取り痕から判断して、玄門立柱石を内側に突出させる擬似両袖式

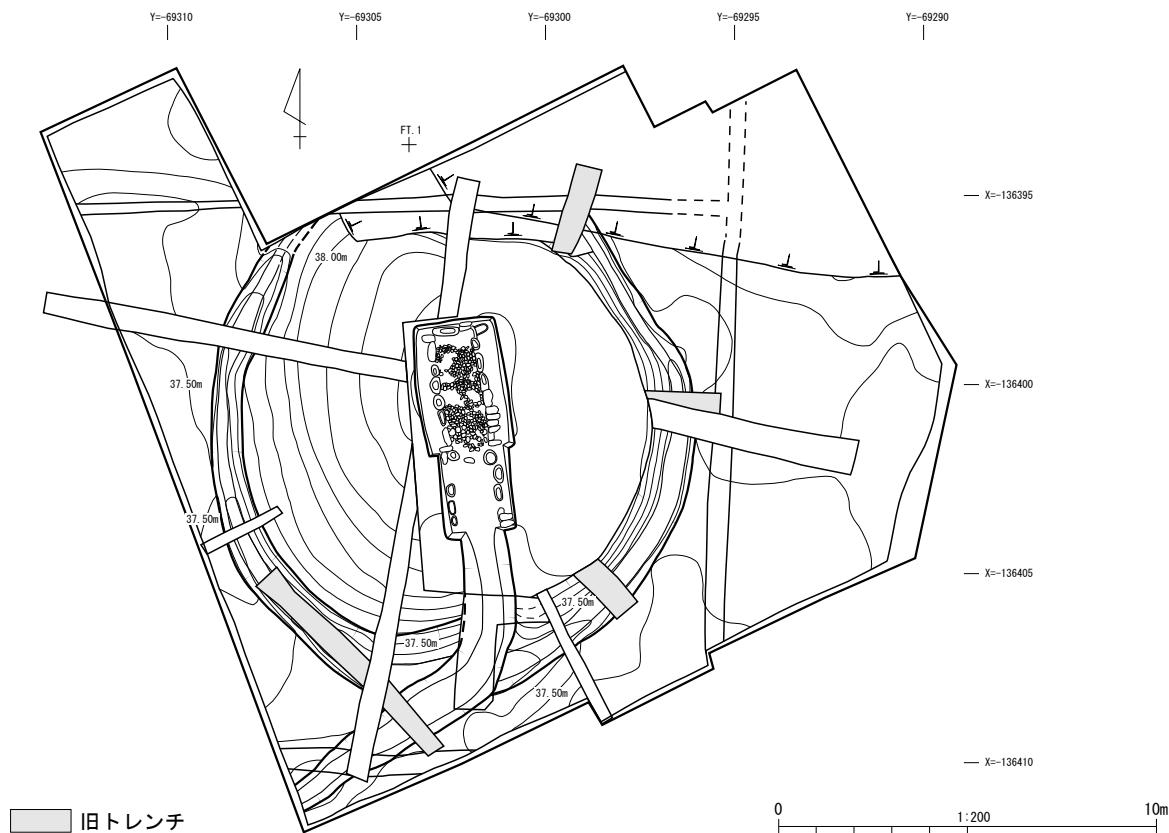
であり、玄室の平面形は、若干胴が張るが、ほぼ長方形である。石室の規模は、全長約5.1m、玄室が長さ3.3m、幅1mで、羨道が長さ約1.8m、幅1mである。玄室、羨道とともに側壁には河原石(円礫)を使用している。さらに、立柱石と奥壁には角礫を使用していたようであり、その破片が抜き取り痕の周辺で検出された。また、奥壁の抜き取り痕には裏込めの石が残っており、10～20cm程度の円礫に加え、側壁に使用されているような円礫も検出された。

石室の側壁は、基底石が側面を内側に向けて積まれており、2段目の石材に比べ大きいものが使用されている。2段目は小口積みされ、大きさが同じぐらいの円礫が使用されている。ただし、玄室の四隅だけは他の基底石よりも小さく、積み方も小口部分を内側に向けて積まれている。これは玄室を構築する際、まず四隅に基底石を据え、大きさを決めてから側壁を積んでいったためと考えられる。そのためか、玄室側壁の基底石は数が同じに揃えられている。さらに、羨道の南東隅にも、小口部分を内側に向けて積まれた基底石が残っており、南西側が残っていないためはっきりしないが、こちらも羨道の大きさを決めるために積まれた可能性が考えられる。また、羨道部の西側では、立柱石の抜き取り痕よりも外側で、円礫が1石確認できる。これは、東側の状況が不明であるため断定できないが、立柱石を据える際に何らかの役割を果たしていた可能性が考えられる。

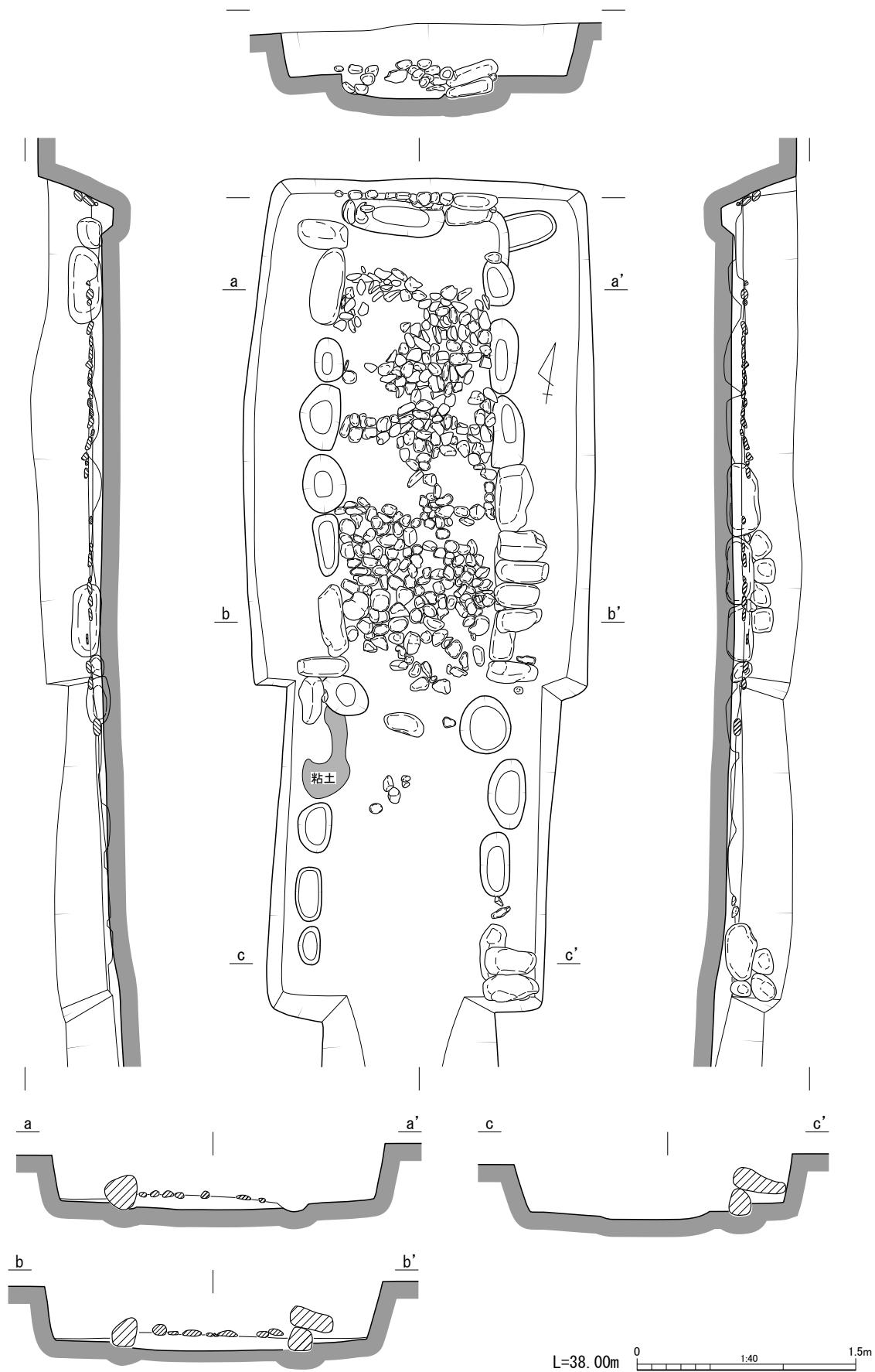
## 2. 石室床面(第10図)

石室床面には、床石が比較的良好に残っており、10～20cm程度の円礫が敷き詰められていた。床石が敷かれているのは玄室だけであり、羨道には見られなかった。また、検出した床面は1面だけであったが、浮いた状態で検出された床石も若干あったことから、床面が2面あった可能性も考えられる。

玄室と羨道の境界には、樋石と見られる側壁よりやや小さい円礫が据えられている。本来は立柱石と立柱石の間に複数の石が据えられていた可能性があるが、抜き取り痕などは確認できなかった。さらに、この石を境に床石が途切れることから、玄室にのみ床石が敷かれていたことがうかがえる。



第9図 D16号墳石室完掘状況



第10図 D16号墳横穴式石室

### 3. 遺物出土状況(第11図～第15図)

石室からは須恵器と鉄製品、玉類が出土した。出土位置は、ほとんどが玄室東側の入り口部分であり、奥壁側で遺物の出土はなかった。

出土した須恵器は第12図27～30の4点だけである。その出土位置は、鉄製品の出土する範囲の外側である。そして、須恵器の下からは鉄製品が出土していないことから、出土した遺物は同時に副葬されたと考えられる。また、28～30は完形で出土しており、ほぼ元位置を保っていると見られるが、27は破片の状態で出土しており、その破片は離れた位置で出土していることから、本来の位置は明らかではない。さらに、27の破片の多くは床石の間にはまり込んでいたため、他の須恵器よりも前に副葬された遺物の可能性も考えられるが、須恵器の特徴からは、年代にそれほど違いがないと見られ、共伴する遺物と捉えられる。

出土した鉄製品は、一部碎片のため不明なものもあるが、ほとんどが鉄鏃と刀子であり、側壁に近い位置でまとまって出土した。出土した鉄鏃は、切先の向きが一定ではなく、束になった状態での出土ではなかった。さらに、複数の鉄鏃が離れた位置のものと接合したことから、検出した際に動いてしまった可能性や整理中に混ざってしまった可能性も考慮しなければいけないが、盗掘を受けた時に動いた可能性が高いと見られる。また、第14図37・44・47・50、第15図64などの鉄製品の一部は床石の下から出土したが、床石と床石の間に入り込んだり、盗掘の際に動いた床石が上に乗ってしまったりしたものではないかと見られる。しかし、第15図84の刀子は床石を外した後に出土したものであり、他の鉄製品よりも前に副葬された可能性がある遺物である。

出土した玉類は、琥珀製棗玉3点とガラス小玉2点だけである。その内、出土位置がはっきりしているのは第15図87・88・91である。87・88は鉄製品と同じ位置で出土しており、元から近い位置に副葬されていたと見られる。91は若干北側に離れ、鉄製品よりも高い位置で出土していることから、元の位置からは動いている可能性が高いと見られる。第15図89の棗玉もその周辺で出土していることから同様と考えられる。また、石室内の埋土を持ち帰り篩にかけたが、第15図90のガラス小玉と鉄製品の破片が見つかっただけであった。そのため、玉類の副葬は初めから少なかった可能性が高いと考えられる。

### 4. 出土遺物(須恵器)(第12図、表2、図版13)

第12図27は破片の状態で出土した壺蓋である。断面形が扁平な台形状で、口径11.3cm、器高3.8cmとなる。天井部と口縁部の境界には沈線が巡り、天井部はヘラケズリされる。

第12図28は完形の壺蓋である。断面形がかまぼこ状で、口径10.7cm、器高3.4cmとなる。27よりも丸みを帯びた器形で、天井部と口縁部の境界に沈線は巡らず、天井部はヘラケズリされる。

第12図29は完形の平瓶である。器形は、丸みを帯びた台形状の体部に、細長い口縁部を持つもので、体部の屈曲部には沈線が施される。口縁部内側から体部の屈曲部付近まで緑色の自然釉がかかる。体部下半は、底部の中心を残してヘラケズリされる。

第12図30は完形の広口壺である。丸みを帯びた器形で、底部は丸底状で肩部が屈曲し沈線を持つ。口縁部は短く外反し、端部が上方につまみ上げられる。口縁部内側から体部中位にかけてと内面底部には明緑色の自然釉がかかる。体部下半はヘラケズリされるが、底部は未調整である。

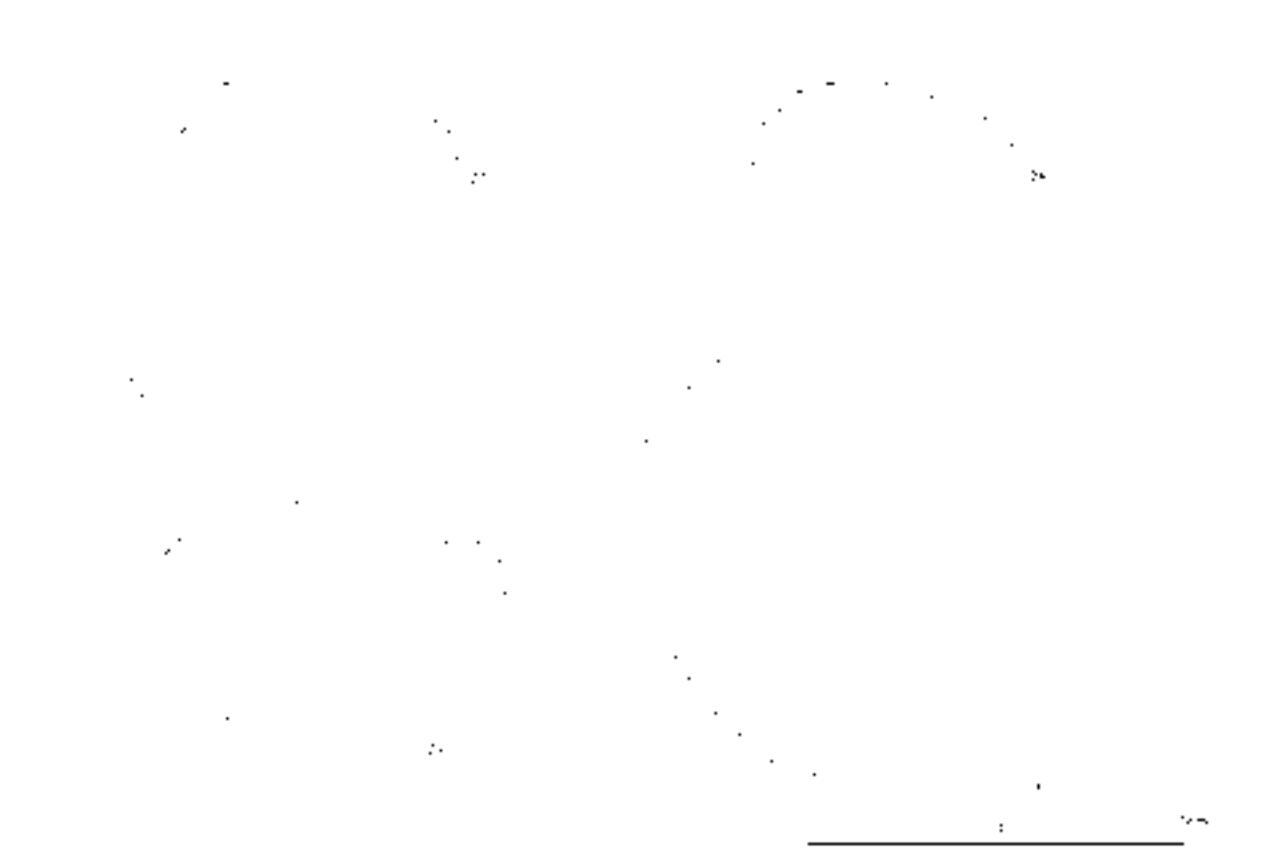
石室から出土した須恵器は、27・28の壺蓋が遠江須恵器編年のⅢ期末葉～Ⅳ期前半のものである。29の平瓶と30の広口壺は湖西窯で特徴的な器形で、それぞれ湖西窯で定型化した時期のものであるため、Ⅲ期末葉以降の時期が考えられる。さらに、出土状況から壺蓋と副葬された時期に大きな違いはないと見られることから、Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半の時期におさまるものと考えられる。また、石室で出土した須恵器の年代は、周溝で出土した須恵器の年代と同じであり、追葬が行われた可能性は低いと言える。



第 11 図 D16 号墳石室遺物出土状況(須恵器)

##### 5. 出土遺物(鉄製品・玉類)(第 14 図, 第 15 図, 表 3・4, 図版 14)

図示した鉄製品は 56 点あり、その内 3 点が刀子で他はすべて鉄鏃である。図示できなかった鉄製品は、いずれも碎片であり、種類までわかるものはなかった。



### 第12図 D16号墳石室出土遺物(須恵器)

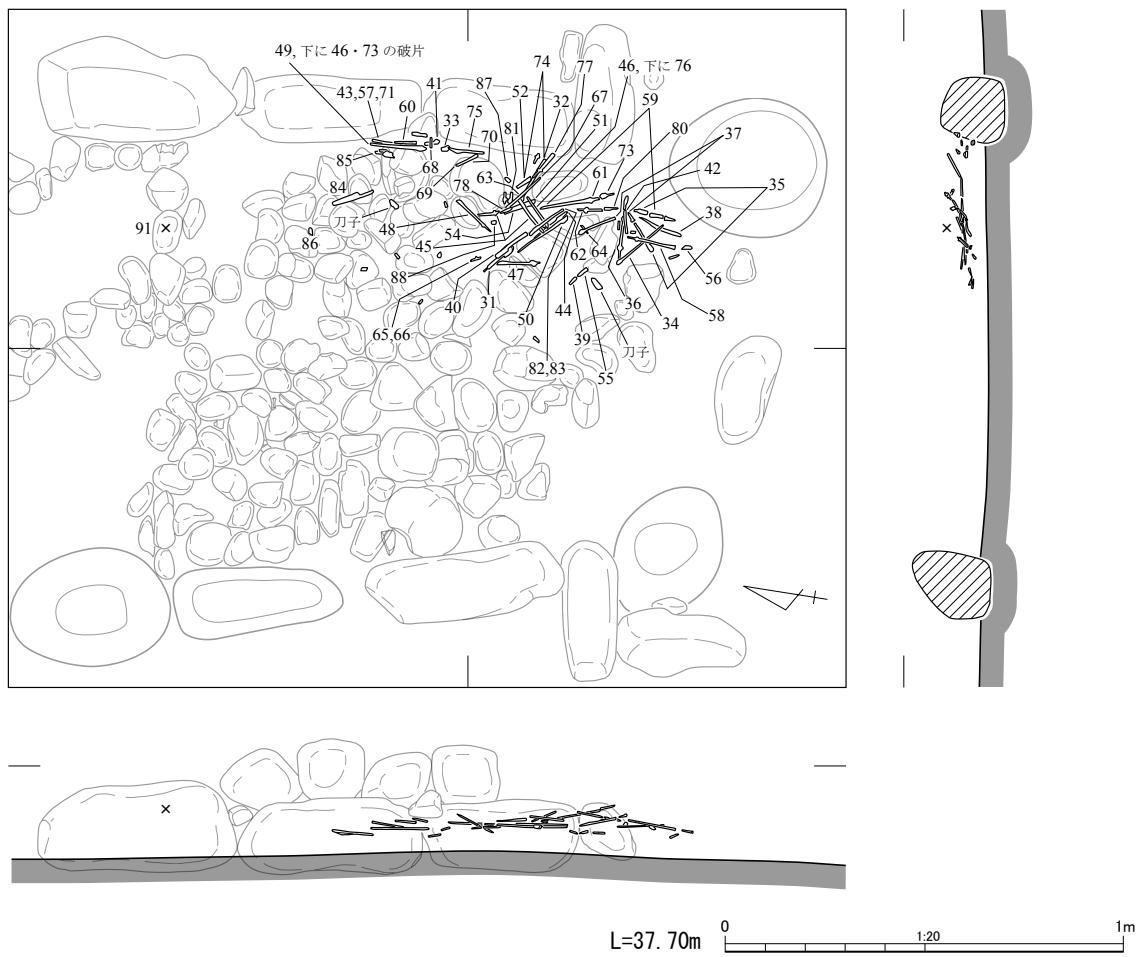
出土した鉄鎌は、鎌身から茎関まで確認できるものが11点あり、鎌身のみのものが14点、茎関のみのものが11点あることから、少なくとも25点以上の鉄鎌が副葬されていたと見られる。

第14図31～33は平根式の鉄鎌である。31は鎌身形態が腸抉長三角形式で、鎌身の先端が丸みを帯び腸抉は不明瞭なものである。茎は先端を除いて残存しており、茎関ははっきりとしないが棘状関と見られる。32は、鎌身が一部しか残っていないが、鎌身形態が腸抉のある三角形式か五角形式のものである。茎はわずかに先端を欠き、茎関は鋸で明瞭ではないが角関のようである。33は鎌身の先端部分である。32と同一個体の可能性もあるが、接点がなかったため別個体として図示した。鎌身形態は三角形式または長三角形式と見られる。その他、図示できなかった平根式の鎌身が1点あり、接点はなかったが32か33の破片の可能性があるものである。

第14図34～56は尖根式の鉄鎌である。鎌身形態は大きく分けて、34～43の鑿箭式と44～56の片刃箭式がある。また、茎関がわかるものはいずれも棘状関である。

出土した鑿箭式の鎌は、刃部が鎌身の両側にあり、鎌身関が無関になるものである。34・35・37・40～42のように鎌身形態が細長い三角形で、鎌身の幅が頸部より広いものと、38・43のように鎌身の幅が頸部とほぼ同じで、鎌身形態が丸みを帯びるものに分けられる。前者はさらに、鎌身が肉厚で細長い形態の37・42と鎌身が比較的薄く偏平になる34・35・40・41に分けられる。いずれも刃部の研ぎ出しあは先端から1cm未満だけである。また、鎌身から茎関までの長さは8cm台のものと10cm台のものがある。

出土した片刃箭式の鎌は、刃部が鎌身の片側しかないもので、鎌身関はいずれも直角関である。刃部の研ぎ出しが、鎌身関まである44・45と、鎌身の先端部しかない46～48に分けられる。また、鎌身関は不明であるが、54～56は鎌身関まで研ぎ出し、51～53は先端部のみ研ぎ出すもので、49・50は鎌身部の遺存状態が悪く不明である。また、鎌身から茎関までの長さは10cm前後のものと13cm台のものがある。



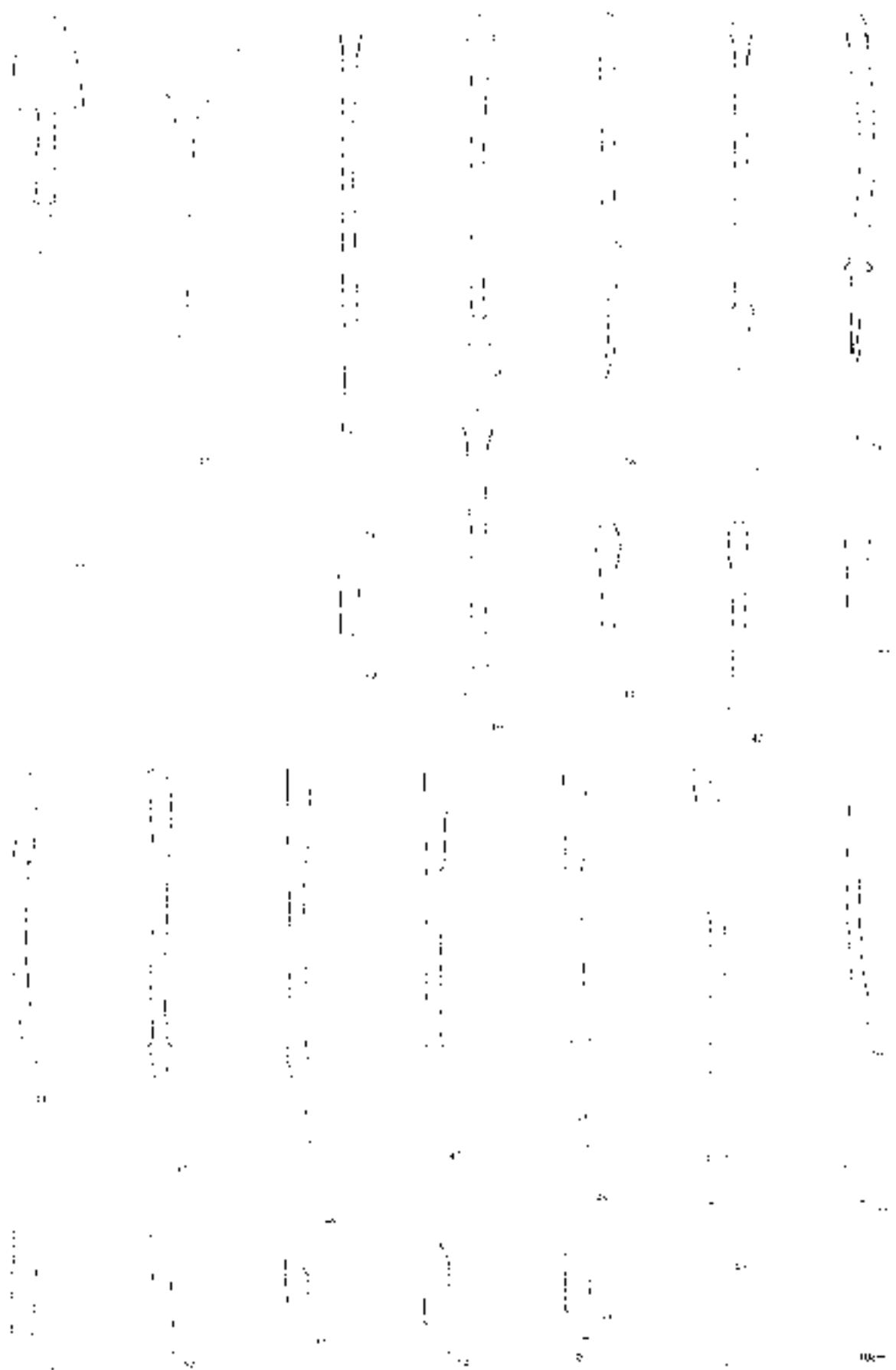
第13図 D16号墳石室遺物出土状況(鉄製品)

第15図57～81は鉄鎌の頸部から茎の部分である。頸部と茎の特徴から57～68と69～83に分けられる。前者は、頸部の断面形が正方形に近く、茎も断面形が方形で細いものである。これらの特徴は、D16号墳で出土した鑿箭式の頸部や茎の特徴と類似しており、鑿箭式の鉄鎌の可能性が高い。後者は、頸部の断面形が偏平な長方形で、茎も偏平な方形で幅が広いものである。これらの特徴は、D16号墳で出土した片刃箭式の頸部や茎の特徴と類似しており、片刃箭式の鉄鎌の可能性が高い。しかし、いずれも鎌身部が残っておらず確実ではないため、D16号墳で出土した鉄鎌では、そのような傾向が見られることを指摘するに止めた。また、茎関が遺存しているもので、鋒により不明な76を除いて、いずれも棘状関である。

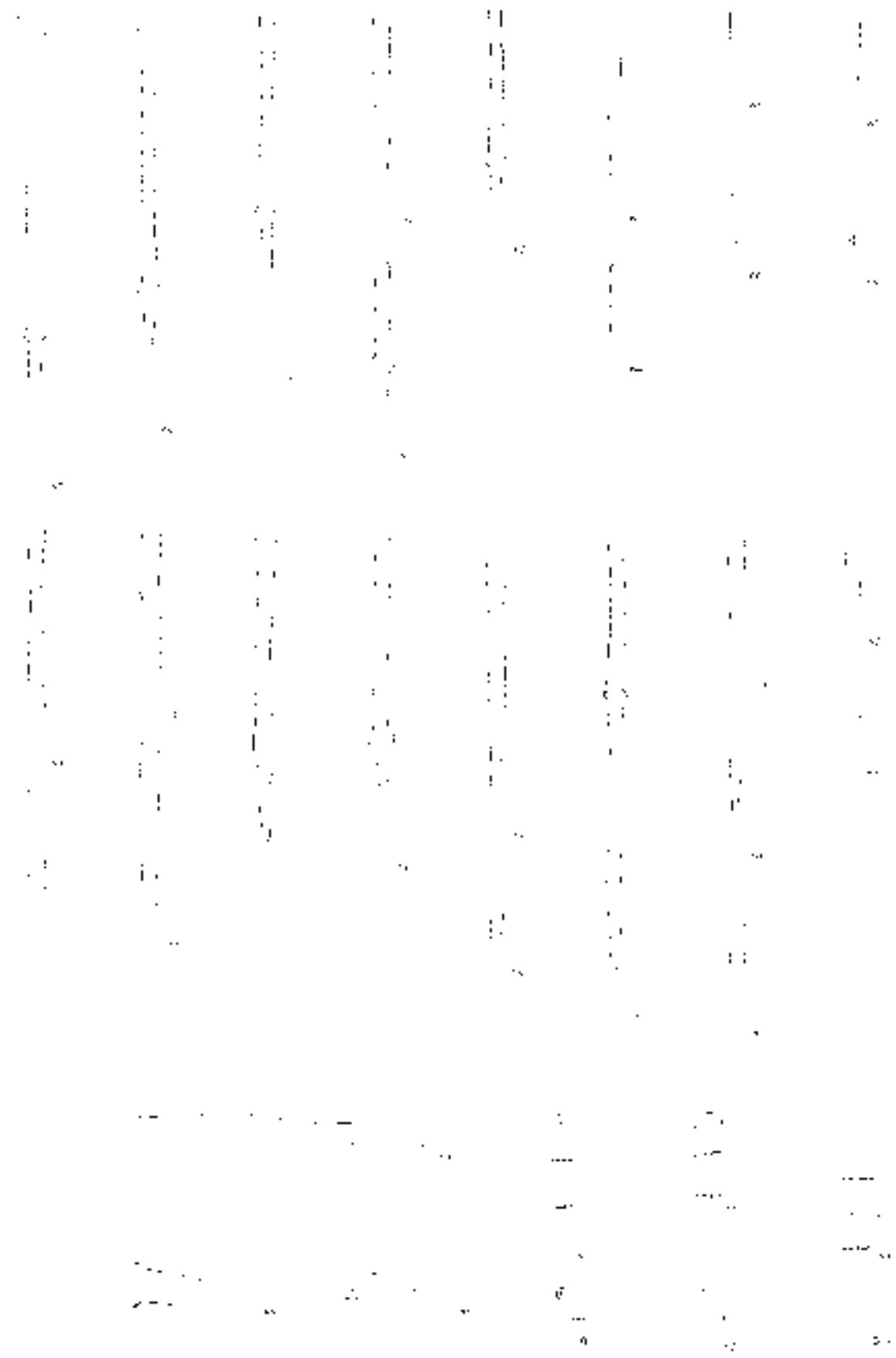
出土した鉄鎌は、その出土状態から一括性が高く、ほぼ同時期に製作されたと考えられる。また、これらの鉄鎌の時期は、共伴する須恵器からⅢ期末葉～Ⅳ期前半と考えられる。

刀子と確認できた鉄製品は5点あり、その内、第15図84～86の3点を図示した。84は刃部と茎が残る刀子である。刃部の切先と刃側は欠損するが、背側には曲線を描く関が見られる。また、関から茎には木質が遺存する。85も刃部と茎が残る刀子である。刃部の切先と刃側は欠損するが、背側と刃側で曲線を描く関が見られる。86は刀子の茎であり、木質が遺存している。

第15図87～91は玉類であり、87～89は琥珀製棗玉、90・91はガラス小玉である。87は長さ1.7cm、幅0.95cmの棗玉である。形状は、若干胴が膨らむが、断面形がほぼ円筒状となる。88は長さ1.6cm、幅1.0cmの棗玉である。形状は、ほぼ長方形で、断面形が楕円形となる。89は長さ2.5cm、幅1.5cmの棗玉である。他の二つよりも大きく、形状は、胴が膨らみ、断面形が円筒状となる。90・91は直径0.4cm、高さ0.15cmのガラス小玉である。ともに透明で紺色をしている。



第14図 D16号墳石室出土遺物(鉄鎌)



第15図 D16号墳石室出土遺物(鉄製品・玉類)

### (3) 築造時期

D16号墳の築造時期は、出土した須恵器から遠江須恵器編年のⅢ期末葉～Ⅳ期前半と考えられ、実年代は7世紀前半と推定される。また、追葬については、石室や周溝で出土した遺物から、行われなかつた可能性が高いと考えられる。

## 第2節 E9号墳

### (1) 墳丘の状況(第16図～第20図、図版5下・6・8下・9)

#### 1. 墳丘(第16図)

E9号墳は、浜松医科大学構内の光量子医学研究センター西側に位置し(第4図)、11次調査や試掘調査で周溝の一部が確認されていた古墳である。調査前には、墳丘はすでに削平され、駐車場の一部となっていた。

調査の結果、盛土は全面的に削り取られていたため、墳丘の構築状況は明らかにできなかった。また、墳丘の形は、周溝が一部でしか検出できなかつたためはつきりしないが、円墳であると見られる。墳丘規模は、周溝内側の直径で約13mあるが、確実な周溝が東側だけであり正確な規模は不明である。

#### 2. 周溝・前溝(第16図、第17図)

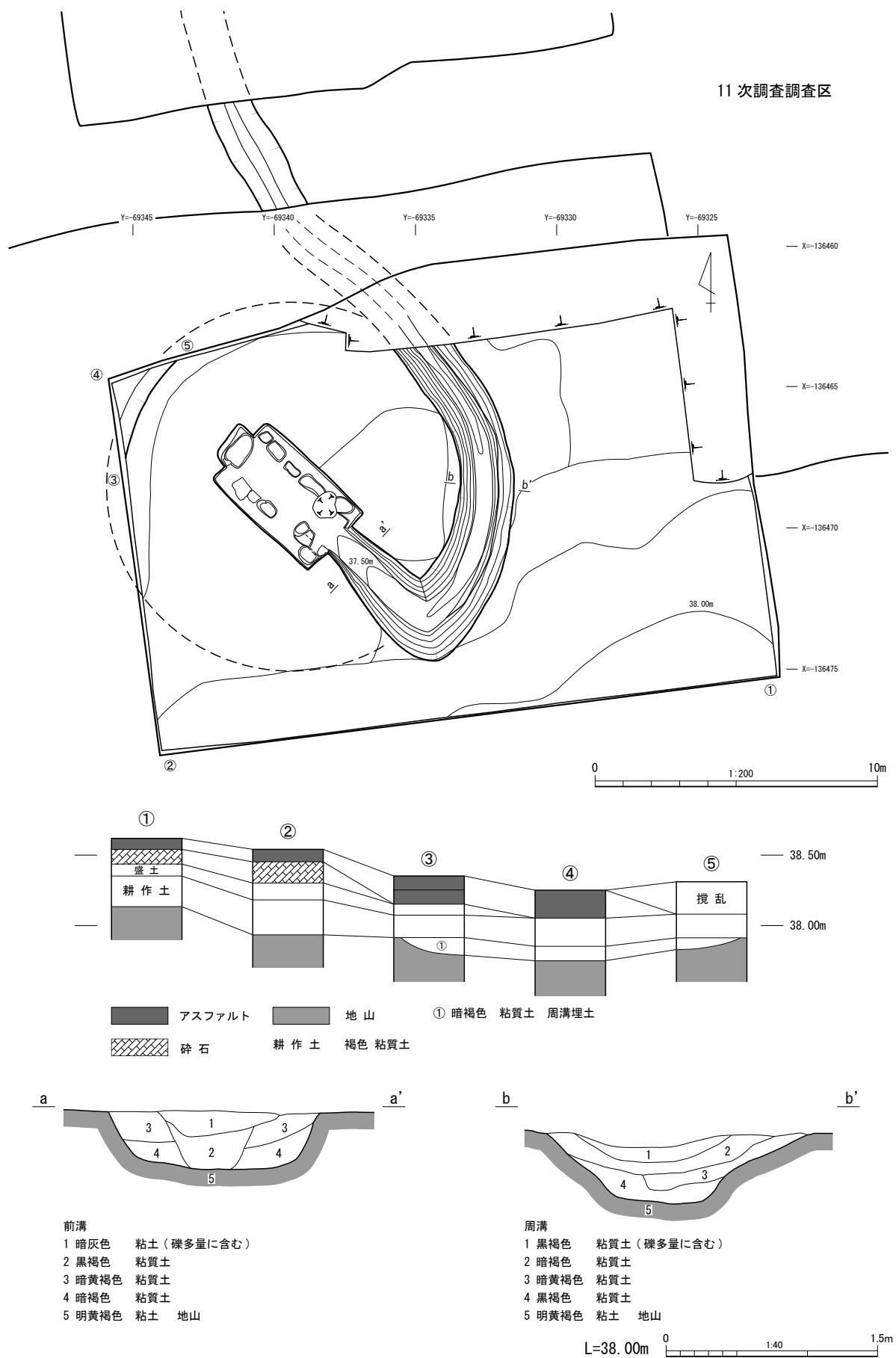
E9号墳の周溝は、石室の東側と北西側で検出することができた。東側の周溝は前溝と一体となっているもので、底面では明瞭な区別はなく、平面形で屈曲するだけである。北西側の周溝は、浅い落ち込みを確認しただけであり、位置としては周溝の可能性が考えられるが、調査区の端であるため一部しか検出しておらず、断定はできなかつた。しかしながら、北西側の落ち込みが周溝であるとすると、E9号墳の周囲には周溝が巡っていたと想定される。そのため、西側にも本来は周溝があったが、掘り込みが浅かつたため削平され、現在は残っていないと考えられる。また、東側の周溝は、11次調査で検出した周溝と接続し、北西方向の谷に延びるようである。

周溝の大きさは、東側で幅1.9～2.2m、検出面からの深さ0.5mとなる。さらに、底面の標高は北側に行くにつれて徐々に低くなる。また、東側の周溝には、上層と下層に黒褐色粘質土が堆積し、その間に暗褐色粘質土や暗黄褐色粘質土が堆積していた。そして、検出面では多くの礫が見られ、1層の黒褐色粘質土に多く含まれていた。北西側の周溝は、調査区の関係から幅は明らかではないが、深さは検出面から約10cmあり、暗褐色粘質土の堆積が見られた。

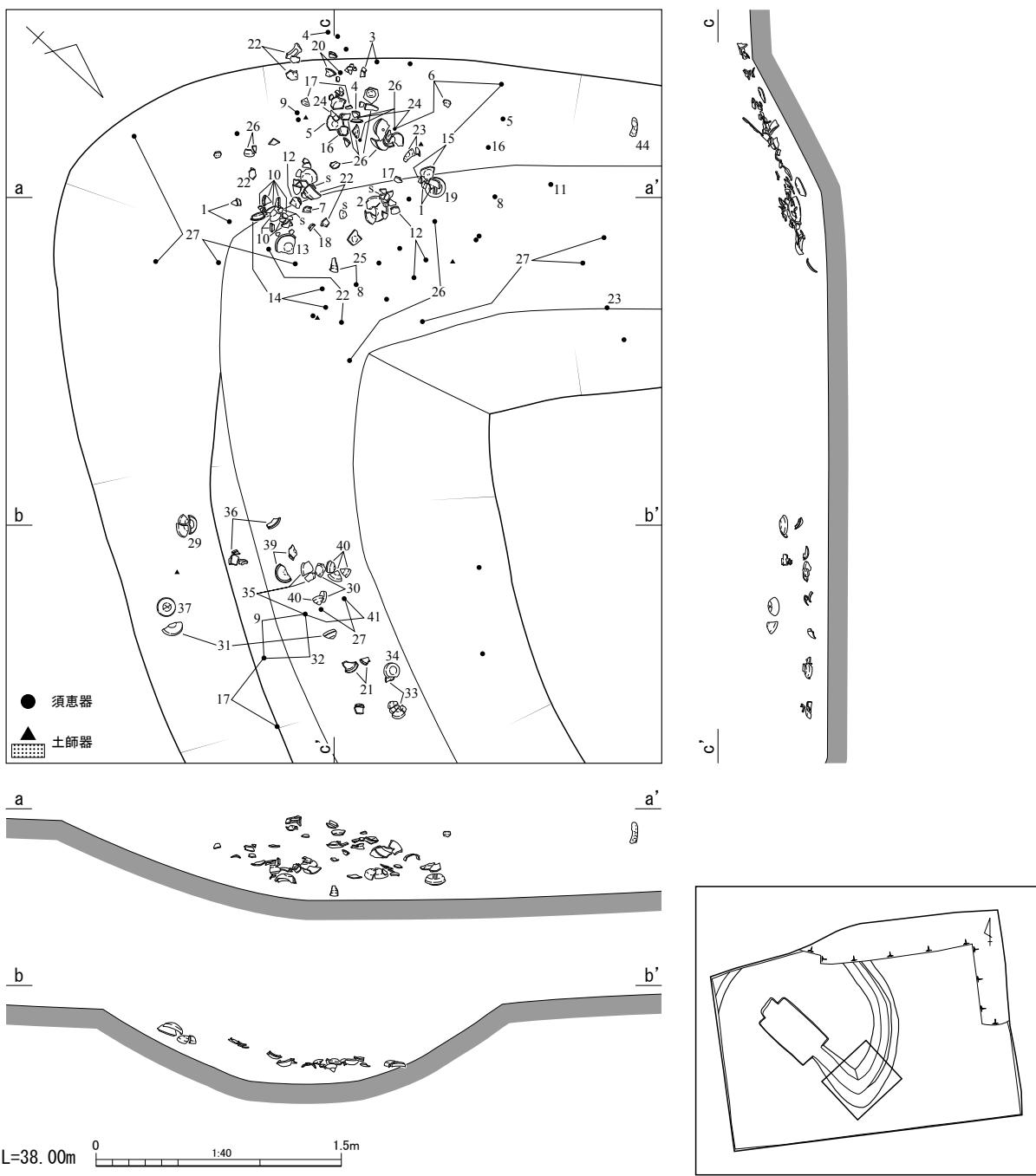
前溝の大きさは、幅1.3～2.0mで、深さは周溝と同じになる。周溝との接続部で西側に広がり、本来は西側の周溝と接続したと見られる。前溝には、上層に多くの礫を含む暗灰色粘土、下層に黒褐色粘質土が堆積していた。さらに、土層の堆積状況からは、追葬の際に掘削された可能性が考えられる。

遺物は集中して出土する場所が2箇所あり、前溝の南端と周溝の南端に集中していた。どちらも近接した位置にあり、その間には空白地があるが、そこには多数の遺物が交じる搅乱が入っていたことから、つながっていた可能性も考えられる。しかし、両集中区の遺物には時期差が見られることから、別々の広がりと捉えたほうが良さそうである。また、遺物はわずかに底面から浮いた状態で出土している。周溝・前溝からの遺物の出土は、その2箇所周辺からがほとんどである。図示した遺物はすべてそこから出土したものであり、多くは完形に近いものであった。

E9号墳の周溝と前溝から出土した遺物には、須恵器と土師器、鉄製品があるが、その大半は須恵器で占められる。須恵器は前溝から周溝にかけて出土し、器種は壺身や壺蓋が多く、その他には高壺や平瓶、壺類などがあり、塙や盞なども出土している。土師器は遺物が集中する箇所でのみ出土し、いずれも碎片で図示できるものはなかつたが、出土した器種は甕であった。鉄製品は前溝の上層から鎌が出土している。



第16図 E9号墳検出遺構・土層断面図



第17図 E9号墳前溝・周溝遺物出土状況

### 3. 出土遺物(第18図～第20図, 第23図44, 表2・3, 図版15～19)

図示した遺物は、第18図1～20、第19図22～28、第23図44が前溝から、第18図21、第20図29～43が周溝から出土したものである。また、1～43は須恵器で、44は鉄製品である。

第18図1～9は壺蓋である。断面形が弧状で口径が13cm前後の1～7と、半球状で器高が高く口径が11cm台の8・9に分けられる。前者はさらに、口縁端部に段を持つ1～3と、口縁端部を丸く仕上げる4～7に分類できる。1～3は古い要素を持つ器形で、天井部と口縁部の境界は屈曲し、さらに沈線が施される。時期は、遠江須恵器編年のⅢ期前葉と考えられる。4～7はそれよりも新しい要素を持つもので、Ⅲ期中葉～後葉と考えられる。8・9はさらに新しい器形であり、底部にはヘラ記号が施され、時期はⅢ期末葉

～Ⅳ期前半に相当すると見られる。

第18図10～21は壺身である。法量により、器径が13～14cm台の10～17・20と、器径が10～12cm台の18・19・21に分けられる。前者は、口縁部の立ち上がりが高く、器壁が比較的薄い。時期はⅢ期中葉～後葉と考えられる。後者は、口縁部の立ち上がりが短く、全体的に小型のもので、Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半と考えられる。また、19・21の底部にはヘラ記号が見られ、19には「一」、21には「一」が4本並んだようなものが見られる。

第19図22は半球形壺部を持つ高壺である。口縁部は端部で屈曲し、面を持つ。壺部には2条の沈線が施され、下部はヘラケズリされる。脚部には2方向に2段の非常に細い透かしが施される。また、透かしと透かしの間に2条の沈線が巡り、透かしの下部にも2条の沈線が施される。脚端部は接地面に突出し、外面に沈線が巡るため断面形がT字状になる。この資料は、その特徴から半球形壺部高壺が定型化する直前の資料と見られ、時期はⅢ期後葉～末葉と考えられる。

第19図23は短頸壺である。小型のもので、口縁部はやや内傾し、口縁部と体部の境界には沈線が入り、明瞭な稜を作る。体部下端から底部にかけてはヘラケズリされる。

第19図24は脚付壺である。全体形は球形で、口縁部でやや内傾しながら立ち上がる。体部には2条の沈線が見られ、体部下端はヘラケズリされる。この器種はⅢ期後葉から盛行し、Ⅳ期にはほとんど見られなくなるようであるため、この資料の時期はⅢ期後葉～末葉頃と考えられる。

第19図25は小型の広口壺である。器形は球胴形で肩が張り、口縁部は外反し端部を丸く仕上げる。体部下半はヘラケズリされ、底部は円錐状になる。この資料は、湖西窯で一般的に見られる広口壺とは器形が異なり、短頸壺に近い器形である。また、類似する資料が西笠子64号窯に見られることから、Ⅲ期中葉頃のものと考えられる。

第19図26・27は大型の平瓶である。26は体部の一部を欠く資料である。器形は、丸みを帯びた逆台形状の体部に短い頸部を持ち、底部は平底になる。体部上面にはボタン状の突起が二つ付き、体部下半はヘラケズリされる。また、頸部には「卅」のようなヘラ記号が施されている。27は口縁部の一部と体部が残る資料である。器形は、球胴形で丸みを帯びており、底部に向けて窄まるため逆台形状の体部になる。頸部は残っていないが、体部には頸部の立ち上がりが見られ、短い頸部を持つと考えられる。体部の調整は、外面がタタキにより行われており、内面にはわずかに当て具痕が観察できた。さらに、体部外面には縄目状の痕跡が残っており、それが体部を一周するように数箇所で確認できた。また、いずれの資料にも、口縁部内側から体部上面にかけて自然釉がかかっていた。これらの時期は、大型平瓶がⅢ期末葉～Ⅳ期後半にかけて見られることから、この時期におさまると考えられる。

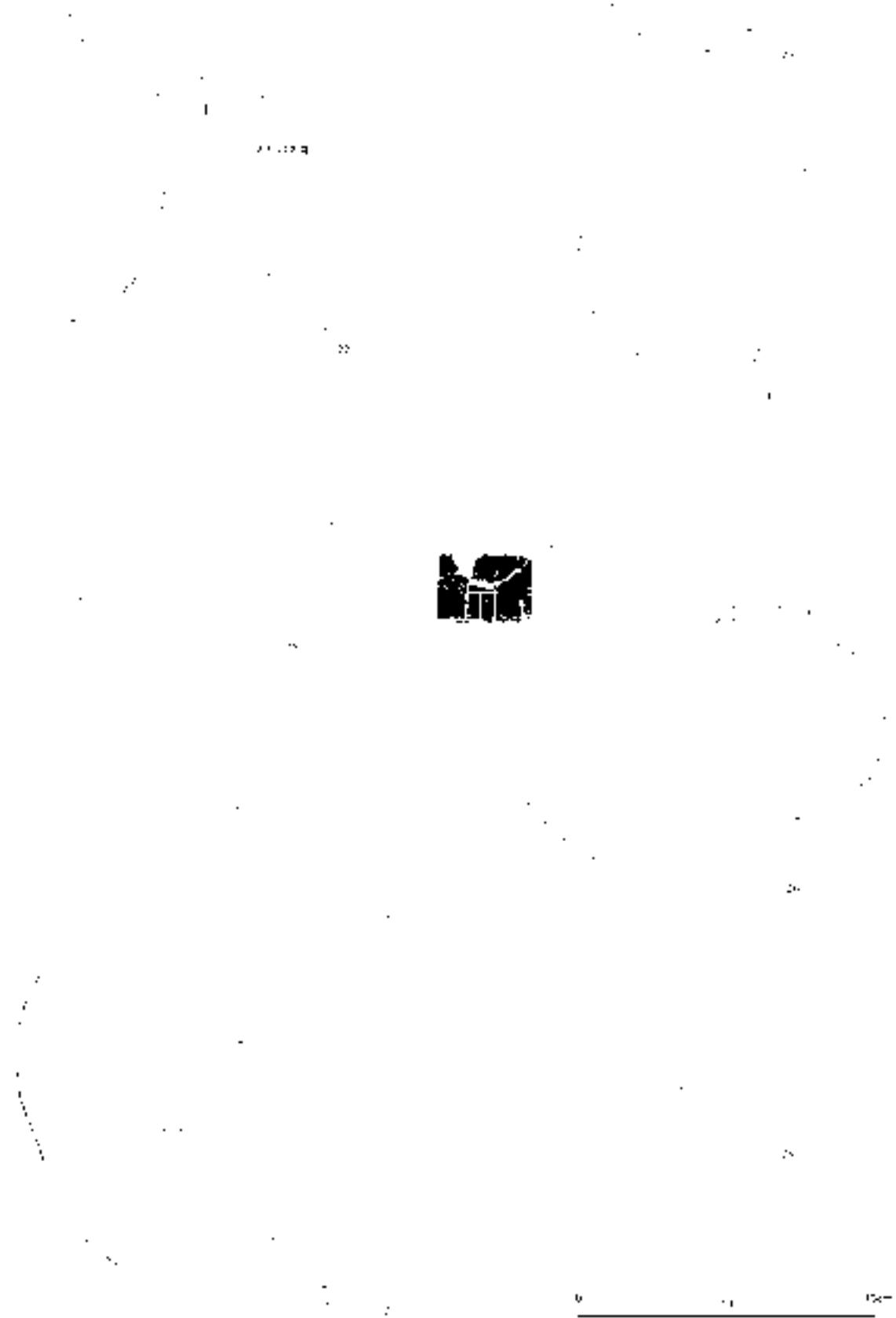
第19図28は壺類もしくは瓶類の口縁部である。口径は5.5cmと小さく器壁も薄く仕上げられている。

第20図29～36は壺蓋である。断面形が弧状で、口径が11cm台の29～32と、口径が10cm前後となる33～35に分けられる。前者はⅢ期末葉～Ⅳ期前半で、後者はⅣ期前半と考えられる。また、32には「×」、33・34には「一」のヘラ記号がそれぞれの天井部に見られる。36は口縁部に返りを持つ蓋である。天井部はヘラケズリされ、ボタン状の偏平な摘みを持つ。口縁部の返りは口縁部よりも少しだけ突出している。E9号墳ではこの1点だけが出土した。この返り蓋は、Ⅳ期前半～末葉までの間の、7世紀後半に特徴的に見られる遺物である。この遺物は、E9号墳で出土した遺物の中で最も新しく、E9号墳の最後の追葬時期を表していると考えられる。

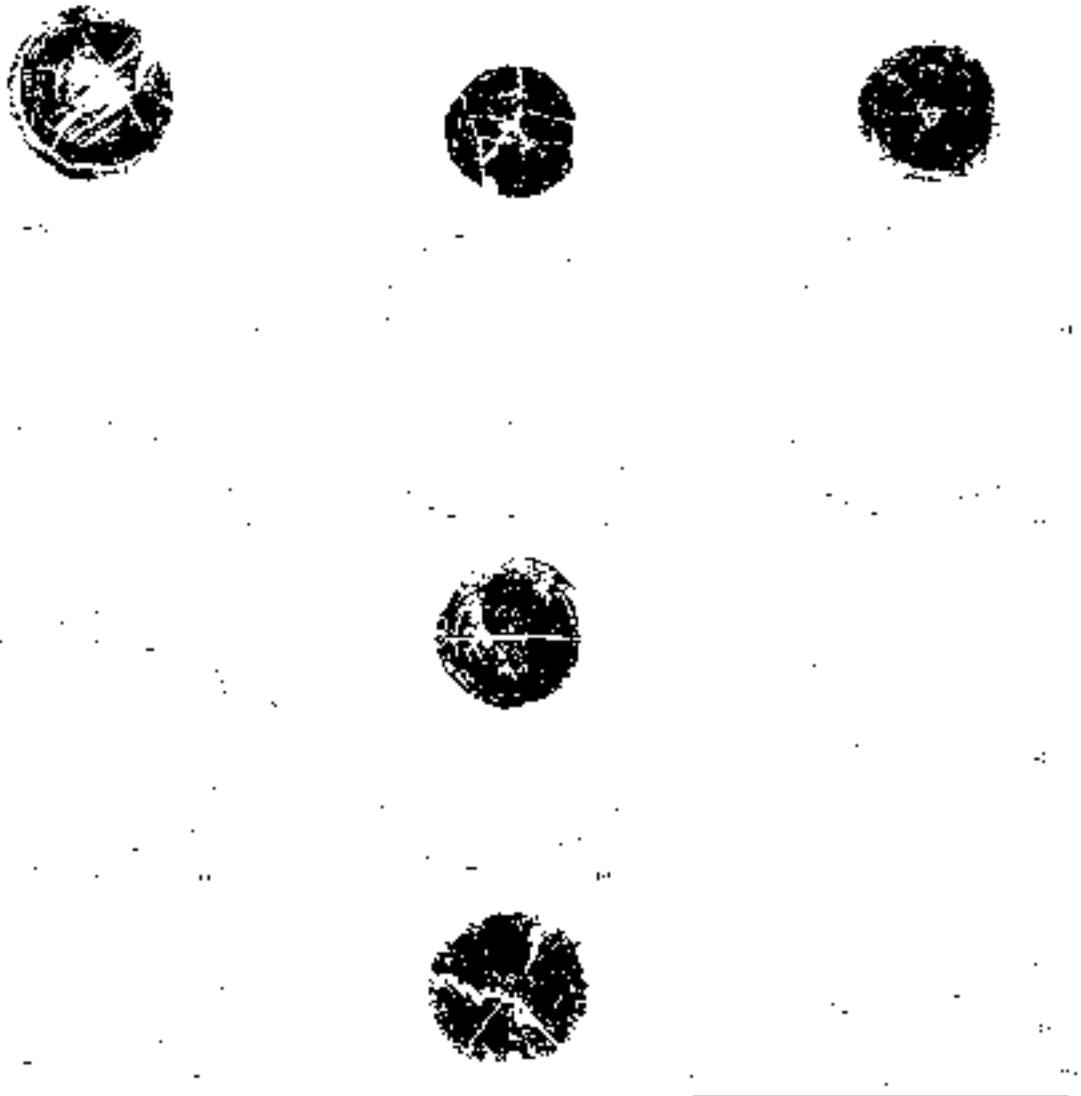
第20図37～41は壺身である。いずれも口縁部の立ち上がりが短く、器径が10～11cm台となる小型の壺身である。底部はヘラケズリされ、37には「一」、40には「×」のヘラ記号が施されている。時期はⅢ期末葉～Ⅳ期前半と考えられる。



第18図 E9号墳前溝出土遺物(1)



第 19 図 E9 号墳前溝出土遺物(2)



第20図 E9号墳周溝出土遺物

第20図42は短頸壺である。口縁部と体部の境界で一段くびれ、口縁部は上方に立ち上がる器形である。

第20図43は壺類の底部である。体部下半から底部にかけての資料で、その下部はヘラケズリされる。

第23図44は曲刃の鎌である。基部の一部を欠いているがほぼ完形である。形態は、背側が直線的で先端が湾曲し、刃側は山なりで中心部の幅が細くなっている。刃は根元の2.5cm程度を残して付けられ、基部は折り曲げられている。

E9号墳から出土した須恵器の年代は、Ⅲ～Ⅳ期にかけてのものであるが、前溝出土のものと周溝出土のものでは時期差が見られた。前溝出土の須恵器はⅢ期中葉～後葉のものが中心で、周溝ではⅢ期末葉～Ⅳ期前半のものが中心であることから、古墳への埋葬が複数回あったことがうかがえる。

## (2)埋葬施設の状況(第21図～第23図、図版7・8上)

### 1. 横穴式石室(第21図)

E9号墳の埋葬施設は、横穴式石室であることがわかった。石室を構築していた石材は後世に抜き取られほとんど残っておらず、奥壁付近に側壁が2石、入り口に1石が残されているだけであった。

墓壙の検出は、旧表土が削平され残っていなかったため、地山面で行った。墓壙には暗褐色粘質土が堆積しており、側壁の裏込め部分ではにぶい黄褐色粘質土が堆積し、地山と色調や土質が類似していたため、検出は容易ではなかった。しかし、墓壙の上部はだいぶ削平されていたものの、比較的良好な状態で検出することができた。検出した墓壙の形態は長方形となるが、奥壁部分が突出している。一般的に見られる墓壙では、奥壁部分が突出することはほとんどなく、地山と壁体の裏込土を識別しきれなかったため、このような形態になってしまった可能性が考えられる。また、E9号墳の墓壙の規模は、全長5.4m、幅2.95mとなり、深さは検出面から約0.3mであった。

石室の側壁は、基底石の一部が残っており、いずれも角礫が使用されていた。側壁の基底石は、奥壁側のものは $70 \times 60\text{cm}$ の大きさで高さが30cmあり、長軸を玄室側に向いている。もう一つは $40 \times 35\text{cm}$ の大きさで高さが25cmあり、奥壁側のものよりも小さい。どちらの石材も玄室側の面は平らに整えられており、面を揃えて据えられている。さらに、石材の側面には、裏込めとして利用されたと見られる10cm程度の円礫が残っていた。石室の入り口部分には、 $40 \times 30\text{cm}$ の大きさで高さ16cmの角礫が短軸を内側に向けて据えられている。これを側壁と考えるならば、玄室は胴が張る形態となる。しかしながら、その石材の外側には抜き取り痕と見られる痕跡があり、また、その反対側にも同様の痕跡が見られる。そのため、こちらを側壁の痕跡と考えるならば、羨道を持たない両袖式石室となる。また、入り口から1m付近には内側に突出する掘り込みを検出しており、玄門立柱石の抜き取り痕の可能性があるが、反対側が搅乱を受けており判断はできなかったため、搅乱である可能性も考えられる。

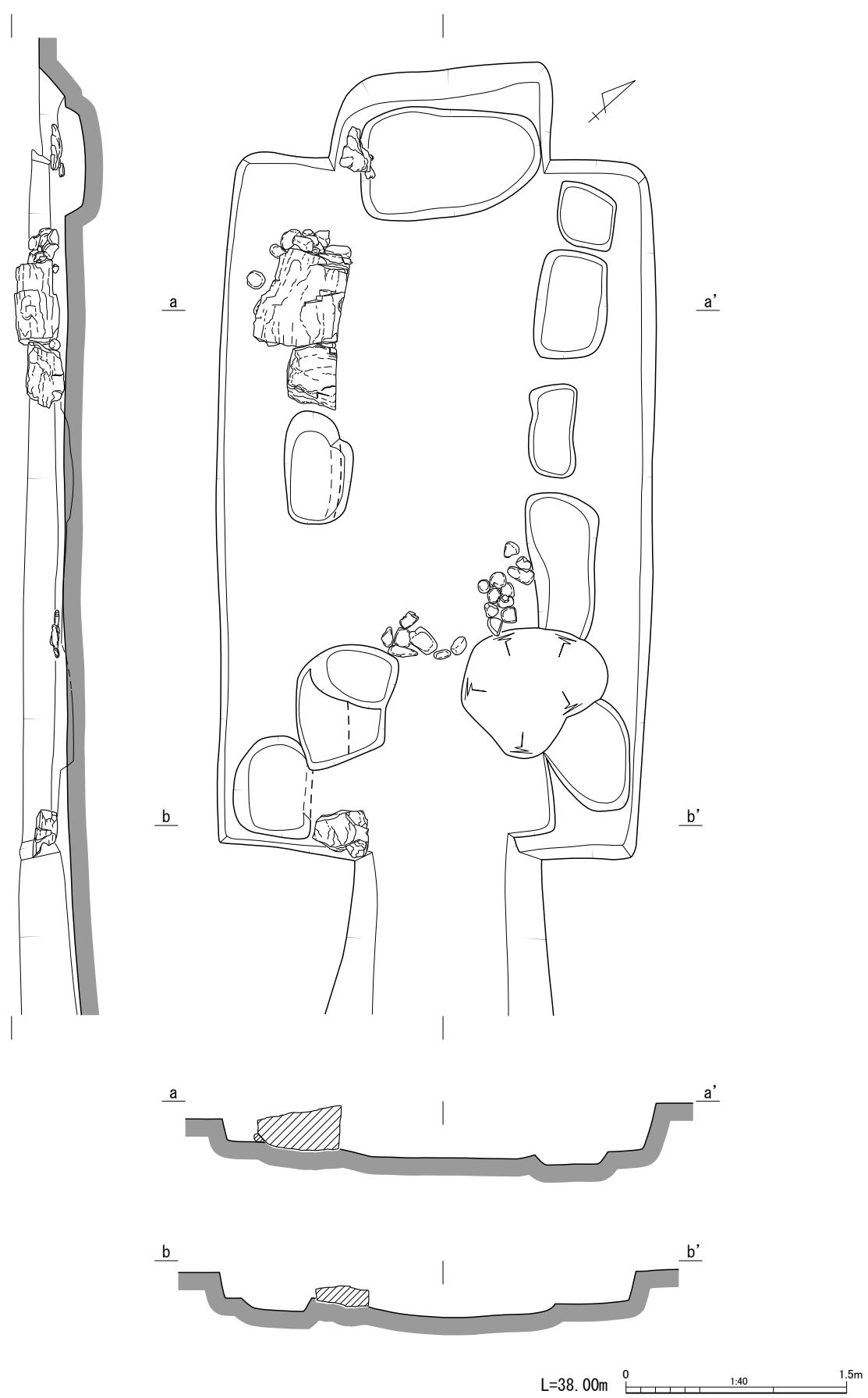
石室の平面形態は、検出された側壁や抜き取り痕などから考えると、無袖式で玄室が胴張形になるもの、羨道を持たない両袖式で玄室が長方形になるもの、短い羨道を持つ擬似両袖式となるものの三形態が考えられる。ここでは石室形態を判断するのは難しいが、無袖式とすると、石室の規模は、玄室の長さが約4.2mとなり、幅が約1.3mとなる。

E9号墳の石室床面は、後世に大部分を荒らされていたため、床石と考えられるものは、入口に近い部分にごく一部しか残っていなかった。敷かれていた床石は10cm程度の円礫で、薄く整地された上に敷かれていた。

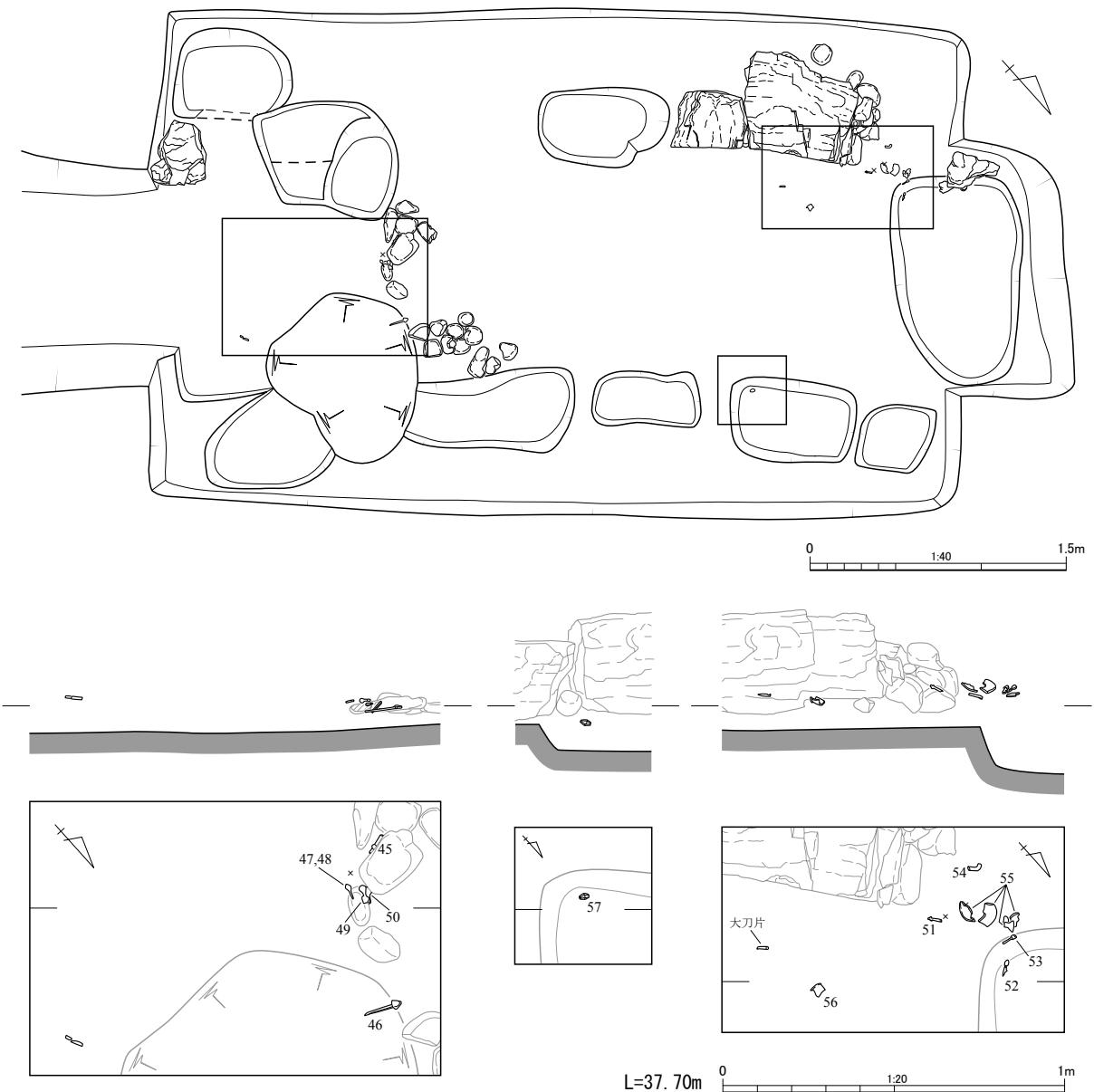
### 2. 遺物出土状況(第22図、第23図45～57)

E9号墳の石室からは、鉄製品と水晶製切子玉が出土した。鉄製品は、奥壁から見て右側と入り口側の2箇所から出土している。奥壁側では、大刀の破片と第23図55・56の刀装具、第23図51～53の鉄鎌、第23図54の不明鉄製品が出土した。入り口側では、第23図45の刀子と第23図46～50の鉄鎌が出土した。いずれもほぼ同じ高さで、床面の直上から出土している。その他、第23図57の切子玉は、奥壁から見て左側の、側壁の抜き取り痕上面から出土した。そのため、後世の搅乱によって動かされ、元位置を保っていないと見られる。

石室から出土した遺物は、刀装具が離れた状態で出土していることから、後世に動かされた可能性が高いと考えられる。しかしながら、鉄製品の出土状態に一定のまとまりが見られることから、それほど大きくは動かされていないと考えられる。したがって、副葬品は、奥壁の右側と玄室入口部分の、少なくとも2箇所に配置されていたと想定できる。



第21図 E9号横穴式石室



第 22 図 E9 号墳石室遺物出土状況

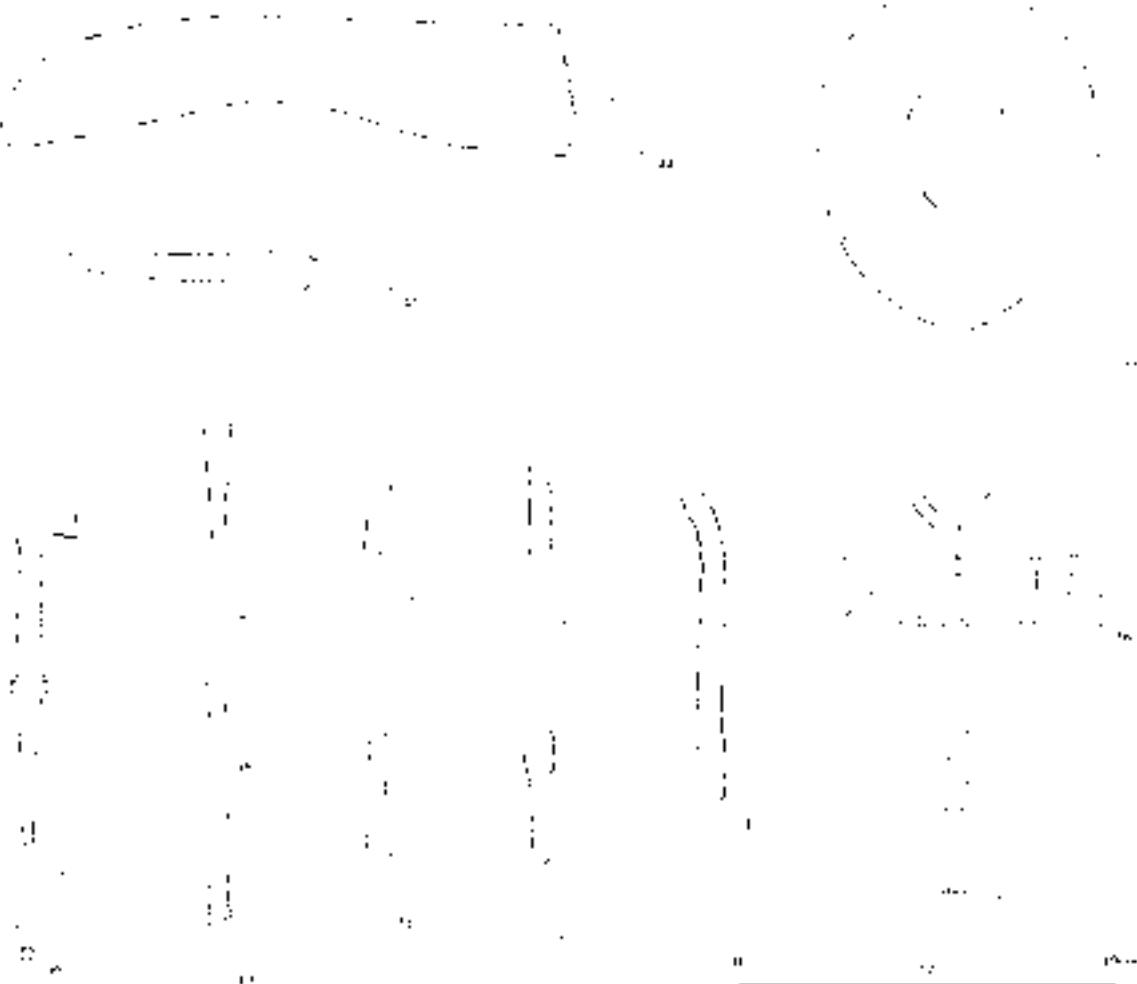
### 3. 出土遺物(第 23 図、表 3、図版 20 下)

図示した鉄製品は 12 点あり、刀子(45)、鐵鎌(46～53)、不明鉄製品(54)、鐸(55)、鋤(56)を図示した。

第 23 図 45 は刃部が細い刀子である。刃部は一部欠損しているが良好に遺存している。また、茎は欠損するが、背側には曲線を描く闊が見られる。

第 23 図 46～53 は鐵鎌である。鎌身から茎まで遺存しているのは 46 だけであり、他は頸部や茎の破片であった。また、茎闊の数から判断して、少なくとも 5 本の鐵鎌があったと見られる。

46 は、鎌身の一部が欠損しているが、平根式の鐵鎌である。鎌身形態は脇挟五角形式で、形状が長三角形式に近い将棋駒形をしている。茎闊は棘状闊であり、一部に有機物が見られる。この形式の鐵鎌は、陶邑編年の TK43 型式以降に出現するもので、今回出土したものは、そのなかでも初原的な形態を持つものである(大谷 2004)。47 は尖根式の鐵鎌で、切先は残っていないが鑿箭式と見られる。48 は頸部、49 は頸部から茎闊の破片である。48・49 は出土状態から 47 と同一個体と考えられる。50・51・53 は茎闊が残る破



第23図 E9号墳出土遺物(鉄製品・玉類)

片である。50は鋒により不明であるが、51は棘状関、53は角関である。52は頸部の破片である。

第23図54は棒状の鉄製品であるが、どのような製品であったかは不明である。形状は、一部がゆるやかに屈曲する他はほぼ直線的である。断面形は、屈曲部分が長方形で、直線部分は正方形に近い形となる。

第23図55は倒卵型の鐔である。全体の三分の二が残っており、大きさは長さ9.1cm、幅7.4cmとなる。第23図56は全体のおよそ半分が残る鏺である。残存部分の半分近くが二重に重なっており、薄い鉄板を丸めて製作されたことがわかる。この鏺は55の鐔に付属していたものと見られ、その他に図示できなかつたが、大刀の刀身と見られる破片も出土していることから、少なくとも一振りの大刀が副葬されていたと考えられる。

第23図57は水晶製の切子玉である。横断面は六角形で、穿孔方法は片面穿孔と見られる。

### (3) 築造時期

E9号墳の築造時期は、出土した須恵器の年代からはⅢ期前葉～中葉と考えられる。さらに、石室から初原的な五角形式の鉄鎌が出土していることから、築造時期はⅢ期中葉以降の可能性が考えられる。そのため、実年代は6世紀後半頃と推定できる。また、須恵器の年代から、追葬は少なくとも1回は行われたと見られ、7世紀前半頃に行われたと想定される。

### 第3節 古墳以外の遺構と遺物

(1) 炭窯跡(第24図、第25図1~3、表2、図版5上)

#### 1. 検出状況(図版5左上)

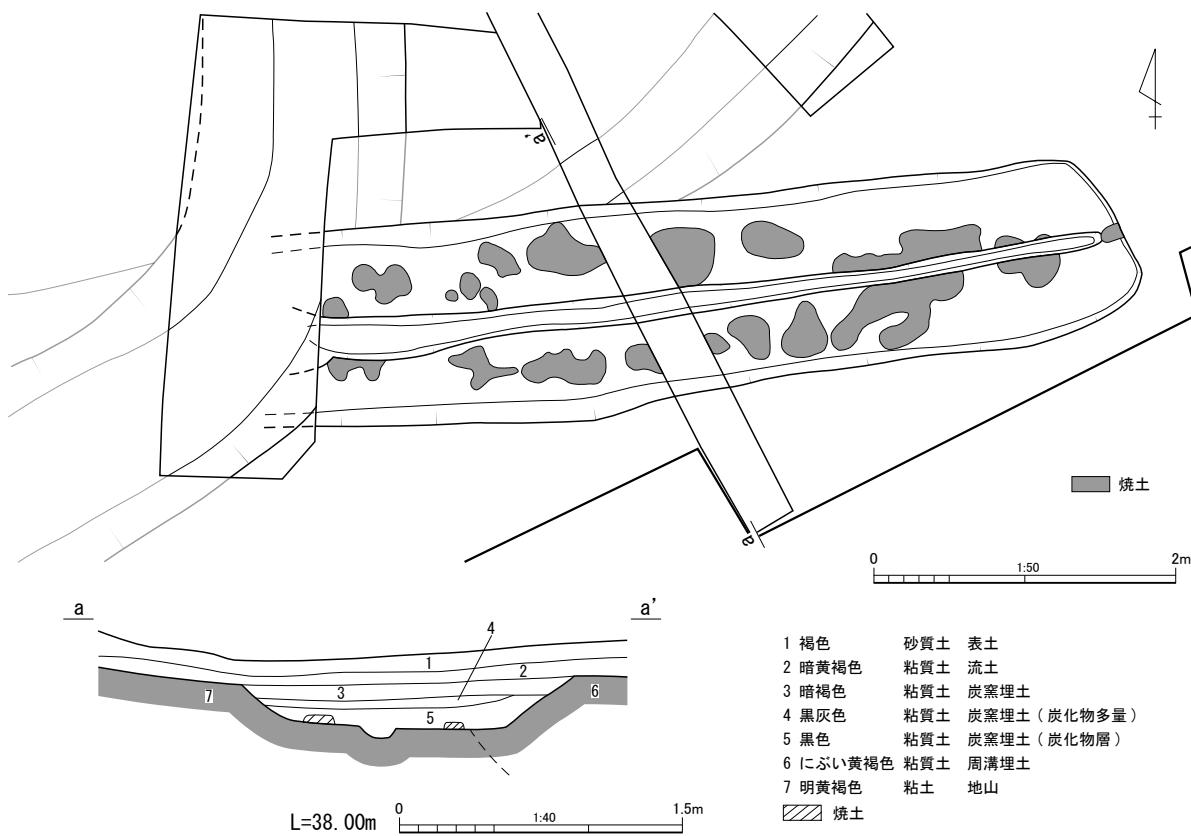
今回の調査で検出した古墳以外の遺構は、炭窯跡が1基だけであった。炭窯跡は、D16号墳の南側で、周溝と前溝が交差する部分の東側に位置している。遺構は、D16号墳の周溝および前溝を検出するために精査していた段階で検出した。また、検出したプランの一部は調査区外にまで延びていたことから、全体の形状がわかる範囲まで、調査区の一部を拡張した。

#### 2. 遺構(第24図)

炭窯跡の平面形は、西端を旧トレンチによって掘削されているが、長方形で長軸が東西方向を向く。大きさは、長さが残存長で約5.3m、幅が約1.2~1.3mとなる。床面には焼土が見られ、さらに、幅約0.1~0.3mの1条の溝が、ほぼ中央を縦断するように掘られている。床面は西側に向かって傾斜し、その比高差は約30cmある。また、焚口部の形状は不明であるが、焚口は床面の傾斜から西側にあったと推定される。

炭窯跡では3層の埋土が確認でき、第24図土層断面図の3~5層が炭窯の埋土である。堆積状況は、上層に暗褐色粘質土層(3層)、下層に炭化物と黒色粘質土の層(5層)が見られ、その間に炭化物を多く含む暗灰色粘質土層(4層)が確認できる。4層と5層で見られる炭化物には、比較的原形を留めたものも存在した。また、6層は周溝の埋土であり、炭窯跡はこの層を掘り込んで構築されている。

出土した遺物には須恵器があり、2層と3層からの出土が多く、4層や5層からの出土は少なかった。そして、土層の堆積状況から、出土した遺物は炭窯跡に伴う遺物とは考えにくく、本来は古墳に伴う遺物であったと推察される。そのため、炭窯跡の年代を直接示す遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。しかしながら、佐鳴湖西岸遺跡群(浜松市文化協会1992)や下滝遺跡群(浜松市文化協会1997)などの類例から、平安時代末~鎌倉時代頃のものであると考えられる。



第24図 炭窯跡

### 3. 出土遺物(第25図1～3, 表2, 図版20上)

炭窯跡から出土した須恵器には、壺身や壺蓋がある。いずれも碎片で、図示できたのは壺蓋2点と壺身1点だけであった。第25図1・2は壺蓋である。1は口径10.6cmで、天井部は残っていないが、断面形が弧状を呈している。2は口径10.0cmで、断面形が弧状となり、天井部外面は未調整である。第25図3は壺身で、器径が9.6cm、器高が3.1cmとなる。口縁部は内傾し、体部は丸みを帯びた器形である。これらの須恵器の年代は、概ね遠江須恵器編年のIV期前半に相当し、D16号墳で出土した須恵器と同じ時期のものである。そのため、本来はD16号墳に伴う遺物であったと考えられる。

#### (2) 遺構外出土遺物(第25図4～12, 表2・3, 図版20上)

遺構外から出土した遺物の内、9点を図示した。第25図4～10が須恵器で、第25図11・12が銅錢である。なお、いずれの遺物も、D16号墳がある調査区で出土したものである。

4～8は南東トレンチ周辺で出土したもので、南東トレンチ東側から南トレンチの間で顕著に遺物の出土が見られた。また、出土した遺物は須恵器が多数を占め、土師器は碎片でごく小量しか出土しなかった。

4・5は壺蓋で、口径が10.8cmと10.6cmのもので、断面形が弧状を呈する。6は壺身で、器径が10.4cm、器高が3.9cmとなるやや深い器形のものである。いずれも遠江須恵器編年のIII期末葉～IV期前半の時期と考えられる。7・8は高壺である。7は半球形壺部を持つ高壺で、壺部から脚部にかけて遺存している。口唇部に内傾面を持ち、脚部には透かしを持たないものようである。遺物の時期は、その特徴からIV期以降と考えられる。いずれの遺物も、時期や出土位置から、D16号墳にかかる遺物と考えられる。

9は西トレンチの北側で出土した平瓶の把手部分である。10は南トレンチの南端付近で出土した壺類の肩部である。どちらも遺物の時期は8世紀以降と考えられる。

11・12は調査区の南端で出土した銅錢である。どちらも北宋錢の元豊通宝で、初鑄年は1078年であることから、炭窯跡の時期と関係する可能性も考えられる。

第25図 炭窯跡・遺構外出土遺物

#### 第IV章 まとめ

今回の発掘調査は、浜松医科大学構内における動物実験施設と光量子医学研究センターの増築に先立つて行ったものである。調査では2基の古墳と1基の炭窯跡を検出した。ここでは、発掘調査で得られた成果を整理してまとめとする。

D16号墳は、直径が11.7mの円墳であることがわかった。築造時期は、遠江須恵器編年でⅢ期末葉頃、実年代で7世紀前半頃と考えられる。さらにD16号墳では、墳丘の盛土が良好に残存していたため、墳丘の構築状況を明らかにすることができた。半田山C～F古墳群では、墳丘が残っている古墳が少なく、これまでに行われた調査では、盛土の方法が不明であったため、墳丘の構築状況はわからなかった。そのため、D16号墳の調査が、墳丘の構築状況がわかる数少ない事例となった。その他にも、古墳に伴う遺構では、墳丘の周囲に周溝を検出した。検出した周溝からは多数の須恵器が出土し、特に前溝と交差する地点に出土が集中していたことから、埋葬にかかわる儀礼が行われた可能性が考えられる。この周溝から出土した須恵器は壺類が主体であり、その年代はⅢ期末葉～Ⅳ期前半のものであった。また、検出した主体部は横穴式石室で、石室形態が擬似両袖式であることがわかった。さらに、D16号墳の主体部は盜掘を受けていたが、比較的良好な状態で副葬品が残存しており、須恵器と鉄製品、玉類が出土した。出土した遺物は、その出土状態から一括性の高い遺物と見られ、須恵器の年代からⅢ期末葉頃のものと考えられる。そして、主体部から出土した須恵器と周溝から出土した須恵器の時期がほぼ重なることから、追葬は行われなかつた可能性が高いと言える。そのため、主体部と周溝から出土した遺物の年代が古墳の築造時期を表していると考えられ、D16号墳の築造時期はⅢ期末葉頃と想定することができる。

その他、D16号墳では鉄鎌がまとめて出土したことが注目される。主体部には、鎌身から判断すると25本以上の鉄鎌が副葬されていたと推定される。この数は、盜掘などを考慮しなければいけないが、半田山C～F古墳群の中では最も多く、三方原古墳群の中でも多い例である。出土した鉄鎌の組成は、鎌身の形状から判断すると、平根式の腸抉長三角形式1点、不明2点、尖根式の鑿箭式10点、片刃箭式12点となる。同様の組成は、平根式の組成に違いはあるものの、三方原古墳群では半田山A4号墳で見られ、さらに、静岡県内で類例を探すと、長泉町の原分古墳でも同じ組成が見られる。また、D16号墳から出土した鉄鎌の時期は、共伴する須恵器から、Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半と考えられる。なお、まとまった量の鉄鎌が副葬されることについて、20点以上の鉄鎌が副葬される古墳は階層性の高さを示していると指摘されている（岩原2001）。しかし、D16号墳は、墳丘や石室の規模が大きい方ではなく、副葬品も鉄鎌の多量副葬を除いて特筆すべきものはなかったため、階層性の高さは見い出せなかった。

E9号墳は、直径が13mの円墳であることがわかった。築造時期は、遠江須恵器編年でⅢ期中葉頃、実年代で6世紀後半頃と考えられる。E9号墳では墳丘の盛土は確認できなかったが、周溝と前溝が検出された。周溝は、墳丘の東側で明瞭な掘り込みを確認できた以外は、北西側で浅い掘り込みを検出しただけである。そのため、今回の調査では墳丘の周囲を周溝が巡っていたかわからなかった。しかしながら、北西側で見つかった落ち込みが周溝であったとすると、墳丘の周囲には周溝が巡っていたと考えられる。また、検出した主体部は横穴式石室で、石室形態は無袖式の可能性が高いと考えられる。遺物は、主体部から鉄製品と玉類、前溝・周溝から須恵器や土師器、鉄製品が出土した。特に前溝・周溝では2地点から集中的に遺物が出土しており、前溝側ではⅢ期中葉～後葉の壺類とⅢ期末葉以降の壺類や瓶類が、周溝側ではⅢ期末葉～Ⅳ期前半の壺類が確認でき、地点ごとに組成や時期の違いが見られた。これらの遺物が、埋葬の際の儀礼に使用されたと考えるならば、周溝・前溝で行われた儀礼は、出土した遺物から少なくとも2回行われたと考えられる。そして、E9号墳の築造時期については、主体部から須恵器が出土していないため、前溝・周溝から出土した遺物で判断すると、古い時期のものはⅢ期中葉～後葉が主体的であるため、この

時期に築造されたと想定することができる。そして、追葬に関しては、Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半と考えられる須恵器がまとまって出土していることから、Ⅳ期前半頃、実年代で7世紀前半頃に一度だけ行われたと想定される。一方で、主体部で出土した遺物は、明確な時期を表すものもなく、E9号墳の築造時期を検討するには不十分である。ただし、五角形式の鉄鎌が出土していることから、埋葬時期の一つの手がかりになると考えられる。E9号墳から出土した五角形式の鉄鎌は、鎌身形態が将棋駒形をしており、このような形は五角形式鎌の初原的な形態であり、陶邑編年のTK43型式に出現することが指摘されている(大谷2004)。そして、茎闊に棘状闊が出現するのが陶邑編年のTK43型式以降であることから(杉山1988)、6世紀後半頃に古墳への埋葬が行われた可能性が高いと考えられる。このことから、E9号墳の埋葬時期の一つに6世紀後半頃を想定することができる。

そして、E9号墳の主体部から出土した遺物では、大刀や刀装具が出土したことが特筆できる。出土した鎧は無窓の板鎧で、大きさが長さ9.1cm、幅7.4cmあり、遠江で出土している鎧の中では大型の部類に入る(西澤2002)。さらに、無窓鎧の大きさと大刀の長さには対応関係があると指摘されることから(豊島2001)、E9号墳には大振りの大刀が副葬されていた可能性が推測される。また、E9号墳で出土したような鉄製の板鎧は、6世紀後半頃に全国的に普及し(臼杵1984、福島1991、菊地1993)、7世紀後半に入ると出土量が減少するようである(福島1991、西澤2002)。そのため、E9号墳から出土した鎧は、E9号墳で出土した他の遺物の時期を考慮すると、6世紀後半～7世紀前半に副葬されたと考えられる。

古墳以外の遺構では、D16号墳の南側で、全長推定6m前後(残存長5.3m)、幅1.2～1.3mの炭窯跡を検出した。これまでの調査で古代末～中世前期の炭窯跡は、佐鳴湖西岸遺跡群(浜松市文化協会1992)や下滝遺跡群(浜松市文化協会1997)、都田山十三遺跡、前平遺跡、沢上遺跡、白昭遺跡(浜松市・浜松市教委ほか1989・1990)、高根山古墳群(浜北市教委1995)、富岡大谷遺跡(浜北市教委2000)などで検出されており、三方原台地に広く分布している。これら三方原台地で検出された類例では、全長3～5.5mのものが主体的である。それに加えて、炭窯跡の幅は1m前後のものが多数を占めており、全長に比例して幅が広くならないことが指摘されている(浜松市文化協会1997)。また、炭窯跡の形態は、三方原台地で見られるものほとんどが長方形であり、全長が短いため方形に近いものはあるが、それ以外の形態は見られない。そして、形態的な特徴では、焼成室の床面に溝が掘られるものが一定数存在することが挙げられ、焼成室の中央に1条の溝が掘られる例やその両側に掘られる例など、複数の形態が存在することが知られる。さらに、焚口が西側や北西側に設けられていることが多い、風向きを考えて構築していることがうかがえる。これらの特徴は、今回の調査で検出した炭窯跡と類似しており、三方原台地で見られる炭窯跡の一般的な傾向と捉えられる。

これまでに多くの炭窯跡が調査されたが、その年代については、ほとんどの炭窯跡から遺物が出土していないため明確ではない。しかし、一部の炭窯跡では山茶碗が出土していることから、12～13世紀代と考えられている。そのため、遺物が出土していない多くの炭窯跡も、形態的な特徴が類似することから、同時期の遺構と考えられている。今回の調査で検出した炭窯跡は、土層の堆積状況から、D16号墳の周溝が埋まりきった時期に構築されており、古墳が築造された7世紀からはだいぶ経った時期の遺構であることがわかる。さらに、三方原台地で検出されている炭窯跡と形態的特徴が類似することから、年代は12～13世紀代と推定される。

## 参考文献

- 岩原 剛 2001 「副葬品の変質」『東海の後期古墳を考える』第8回 東海考古学フォーラム 三河大会
- 臼杵 熊 1984 「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号
- 大谷宏治 2000 「遠江・駿河における古墳時代後期の階層構造」『研究紀要』第7号 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2003 「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鎌の変遷とその意義」『研究紀要』第10号 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷宏治 2004 「東と西の狭間」『設立20周年記念論文集』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 菊地芳朗 1993 「東北地方における横穴の出現年代」『福島県立博物館紀要』第7号
- 静岡県考古学会 2003 『静岡県の横穴式石室』
- 静岡県考古学会 2008 『東国に伝う横穴式石室』静岡県考古学会 2007年度シンポジウム  
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003 『研究紀要』第7号  
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 『原分古墳 調査報告編』
- 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鎌について」『権原考古学研究所論集』第8号
- 鈴木一有 2000 「遠江における横穴式石室の系譜」『浜松市博物館報』第13号 浜松市博物館
- 鈴木一有 2001 「東海地方における後期古墳の特質」『東海の後期古墳を考える』第8回 東海考古学フォーラム 三河大会
- 鈴木敏則 1988 「遠江における群集墳の終末について」『静岡県考古学研究』21
- 鈴木敏則 2001 「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅 第5分冊 補遺・論考編』第1回 東海土器研究会
- 鈴木敏則 2004 「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会
- 高橋 透 2009 「東日本太平洋沿岸地域出土須恵器 フラスコ瓶の編年」『考古学集刊』第5号
- 田村隆太郎 2003 「副葬鎌群への指向」『研究紀要』第10号 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 田村隆太郎 2008 「遠江における無袖式石室の展開」『東国に伝う横穴式石室』静岡県考古学会 2007年度シンポジウム
- 東海土器研究会 2000 『須恵器生産の出現から消滅』第1回 東海土器研究会
- 豊島直博 2001 「古墳時代後期における直刀の生産と流通」『考古学研究』第48巻 第2号
- 西澤正晴 2002 「遠江・駿河における鉄製板蟬の変遷と展開」『研究紀要』第9号 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 浜北市教育委員会 1995 『浜北市高根山古墳群』
- 浜北市教育委員会 2000 『内野古墳群』
- 浜松市遺跡調査会 1984 『半田山古墳群 A 小支群・半田山Ⅲ遺跡』
- 浜松市・浜松市教育委員会、(財)浜松市文化協会 1989 『都田地区発掘調査報告書 上巻』
- 浜松市・浜松市教育委員会、(財)浜松市文化協会 1990 『都田地区発掘調査報告書 下巻』
- (財)浜松市文化協会 1986 『四ツ池古墳群』
- (財)浜松市文化協会 1992 『佐鳴湖西岸遺跡群』
- (財)浜松市文化協会 1997 『下溝遺跡群』
- (財)浜松市文化協会 1998 『宇藤坂古墳群』
- (財)浜松市文化振興財団 2008 『四ツ池古墳群 2次』
- 福島雅儀 1991 「鉄製板蟬付鉄刀の成立」『蝦夷穴12号横穴墓調査報告』中島村文化財調査報告書第2集







# 写 真 図 版





D16号墳調査前状況(南西から)



D16号墳完堀状況(南から)

図版2



D16号墳西トレンチ盛土(北から)



D16号墳東トレンチ周溝(北から)

図版 3



D16号墳石室完堀状況 1(南から)



D16号墳石室完堀状況 2(北から)

図版 4



D16号墳石室遺物出土状況 1(西から)



D16号墳石室遺物出土状況 2(北から)

図版 5



炭窯検出状況および土層(東から)



炭窯完堀状況(西から)



E9号墳完堀状況(北東から)

図版 6



E9号墳前溝土層(北西から)



E9号墳周溝土層(南から)

図版 7



E9号墳石室完堀状況 1(南東から)



E9号墳石室完堀状況 2(北西から)

図版 8



E9号墳石室遺物出土状況(北東から)



E9号墳前溝および周溝遺物出土状況(北東から)



E9号墳前溝遺物出土状況(北から)



E9号墳周溝遺物出土状況(北西から)

図版 10



D16号墳周溝出土遺物(1)

図版 11



D16号墳周溝出土遺物(2)

図版 12



D16号墳周溝出土遺物(3)・前溝出土遺物



D16号墳石室出土遺物集合



27



28



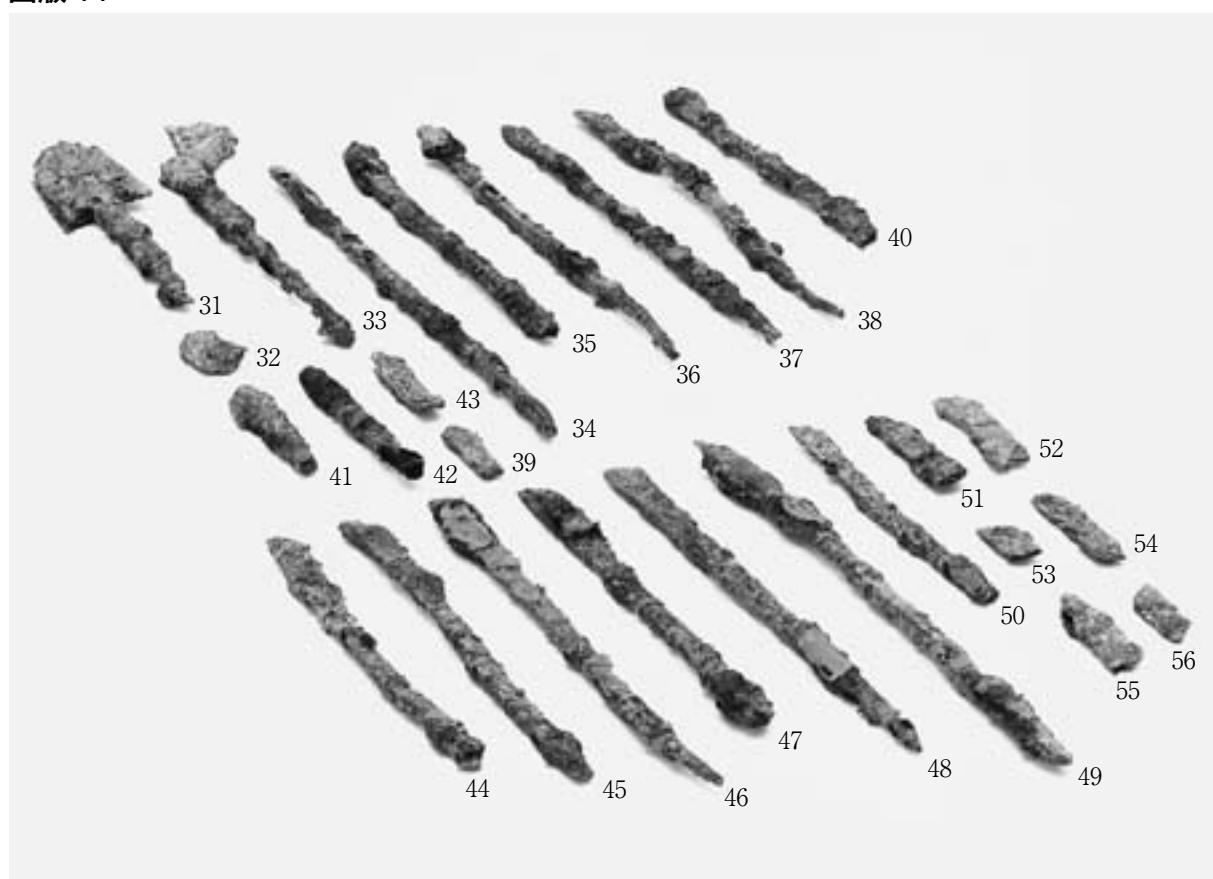
29



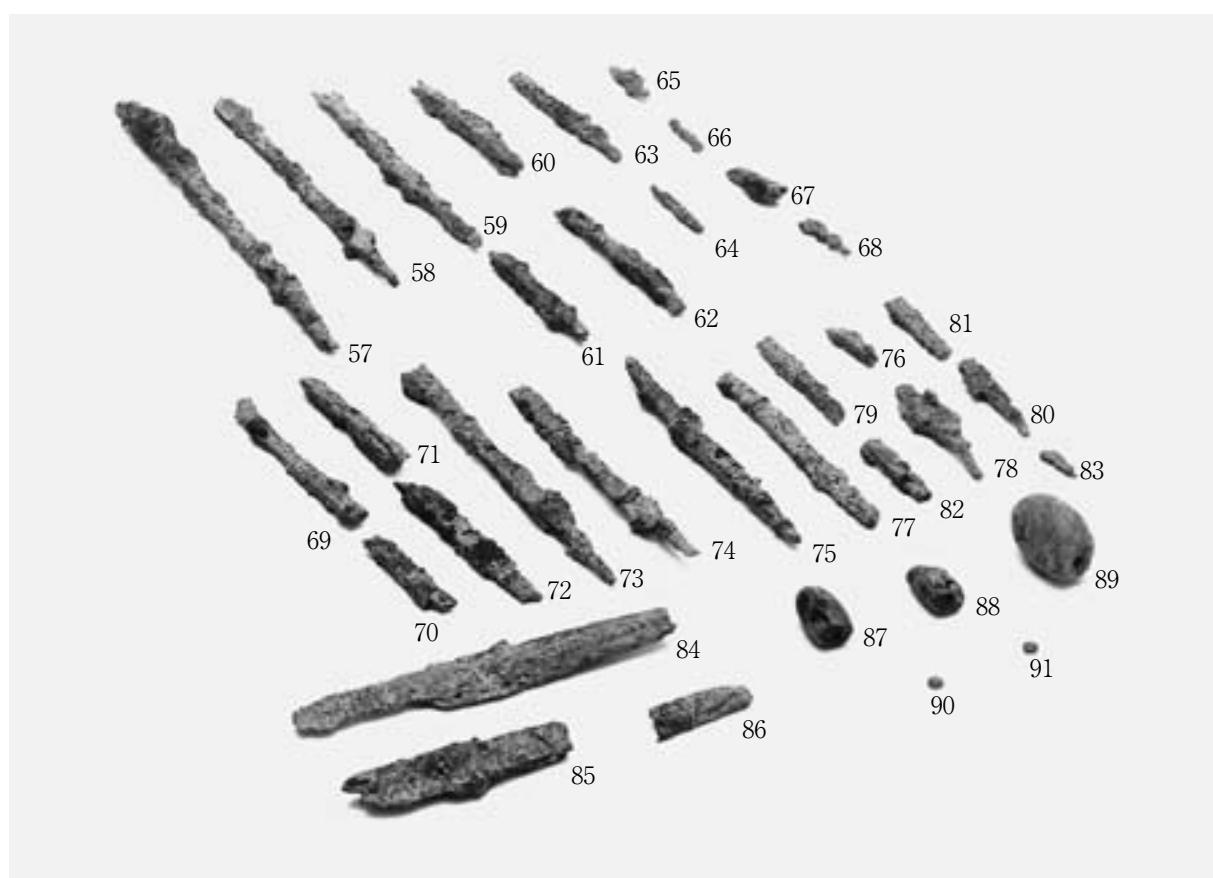
30

D16号墳石室出土遺物

図版 14



D16号墳石室出土鉄鎌



D16号墳石室出土鉄製品・玉類



E9号墳出土遺物集合



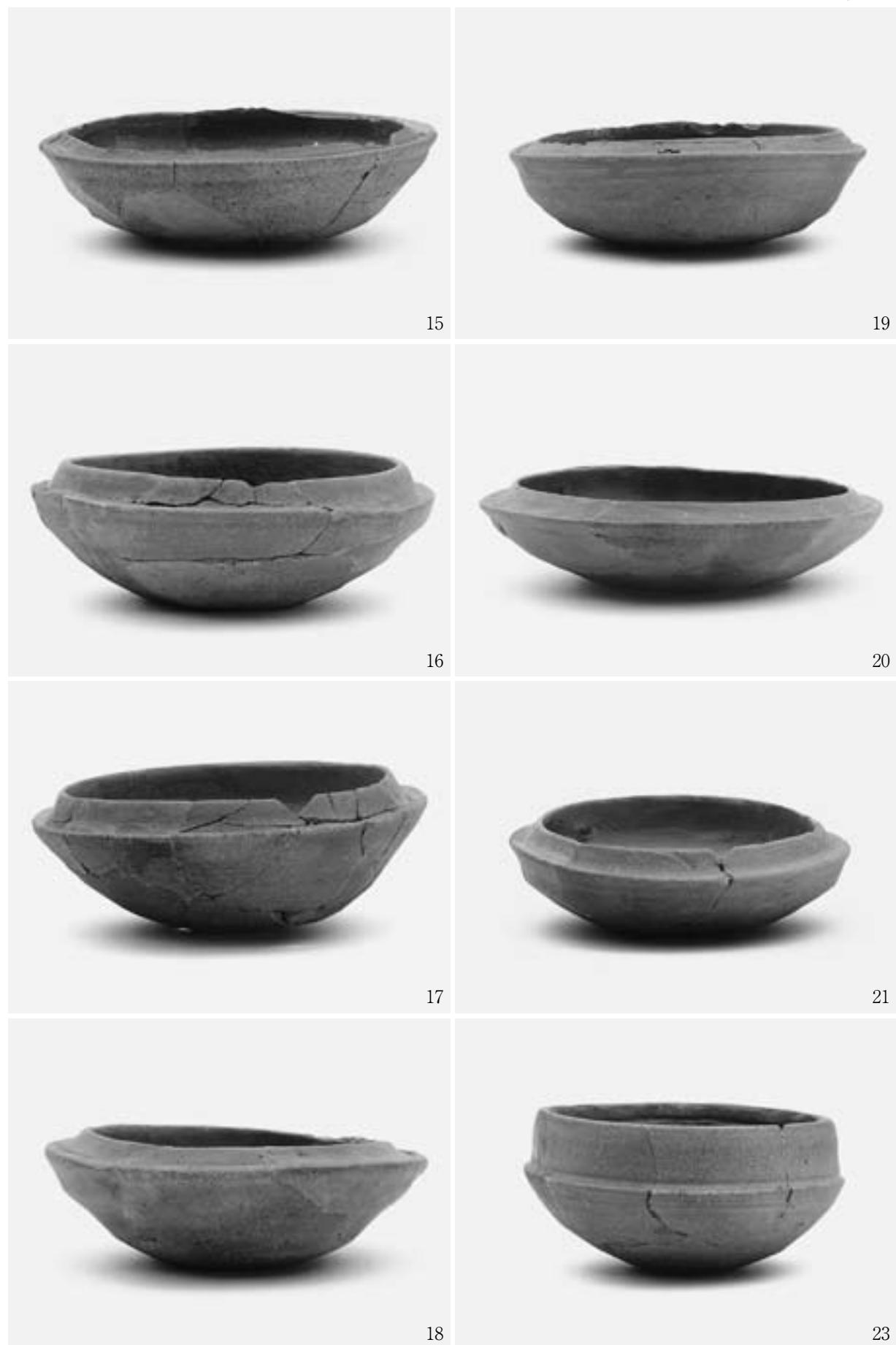
D9号墳前溝出土遺物(1)

図版 16



E9号墳前溝出土遺物(2)

図版 17



E9号墳前溝出土遺物(3)

図版 18



22



26



25



27



29



31

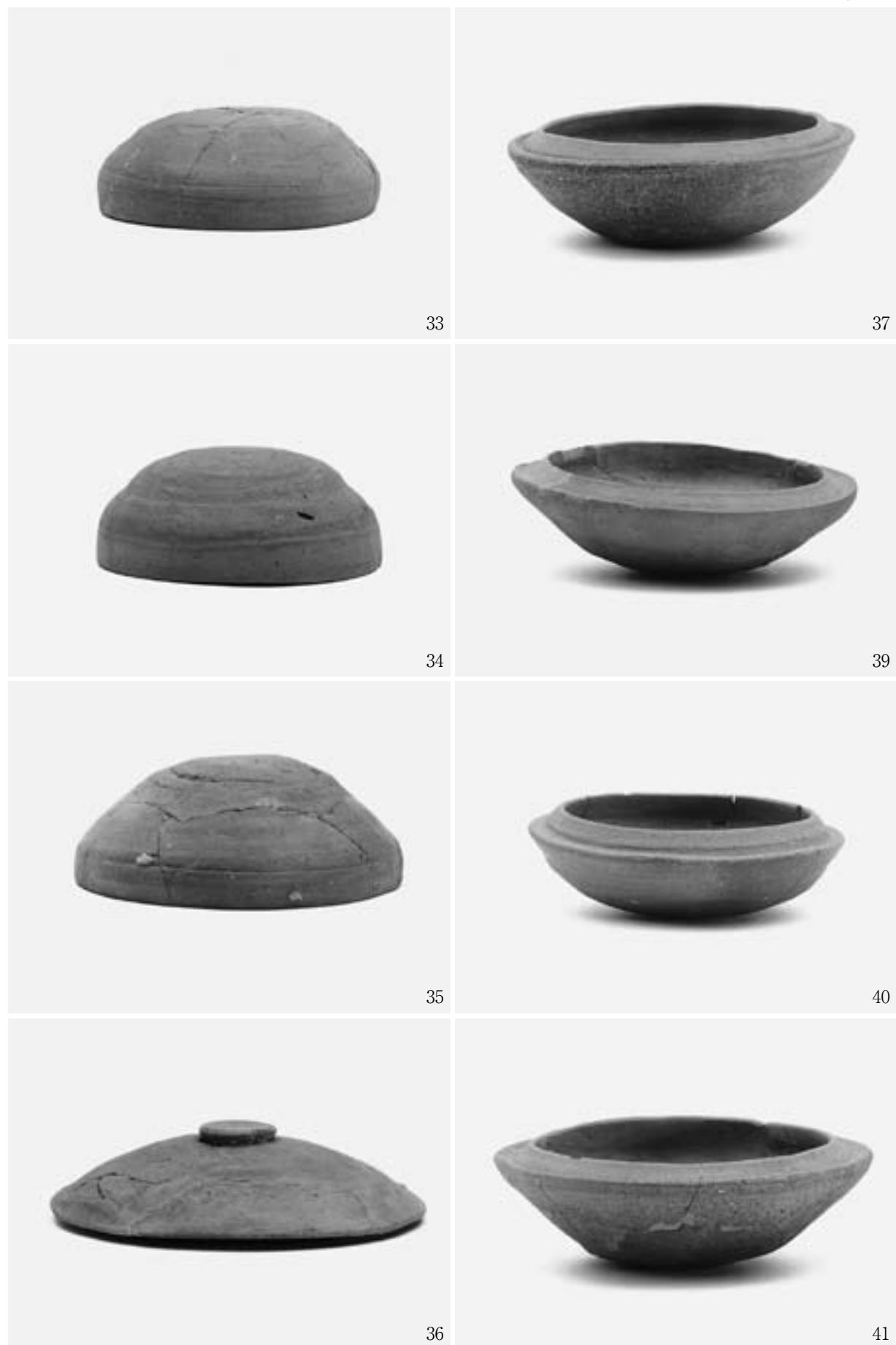


30



32

図版 19

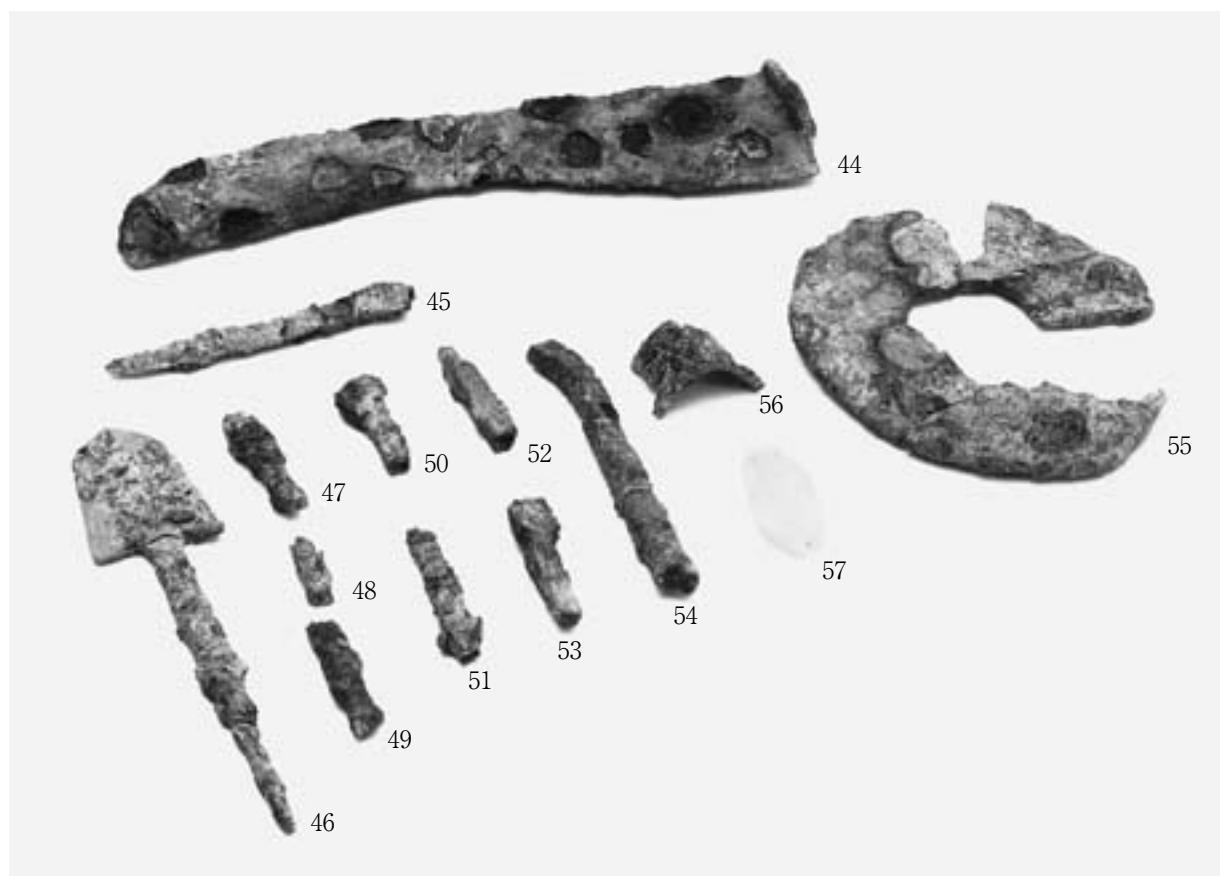


E9号墳周溝出土遺物(2)

図版 20



E9号墳周溝出土遺物(3), 炭窯跡・包含層出土遺物



E9号墳出土鐵製品・玉類

## 報 告 書 抄 錄

書名(ふりがな)	半田山 D16・E9 号墳 (はんだやま D16・E9 ごうふん)							
編著者名	関根章義							
編集機関	浜松市教育委員会 〒430-0917 浜松市中区中央 1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟  浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当(浜松市教育委員会の補助執行機関) 〒430-0946 浜松市中区元城町 103-2 TEL(053)457-2466 FAX(053)457-2563							
発行機関	財団法人 浜松市文化振興財団 〒430-7790 浜松市中区板屋町 111-1							
発行年月日	2010 年 3 月 10 日							
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
半田山古墳群 <small>はんだやまこふんぐん</small>	静岡県 浜松市 東区 半田山 一丁目	22202	2-01-9	34 度 45 分 50 秒	137 度 44 分 40 秒	2009 年 5 月 8 日 ～ 2009 年 7 月 27 日	643 m <sup>2</sup> (D16 号墳) (約 309 m <sup>2</sup> ) (E9 号墳) (約 334 m <sup>2</sup> )	実験施設およ び研究セン ターの増築に 先立つ発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
D16 号墳	古墳	古墳時代 (後期)	円墳・ 横穴式石室・ 周溝	須恵器・土師器・ 鉄製品(鎌・刀子)・ 琥珀玉・ガラス小玉	副葬品が良好に残っ ており、鉄鎌が多数 出土した。			
E9 号墳	古墳	古墳時代 (後期)	円墳・ 横穴式石室・ 周溝	須恵器・土師器・ 鉄製品(鎌・鍔・鎌)・ 切子玉	側壁に角礫を使用し た横穴式石室を持つ。			

半田山 D16・E9 号墳

平成 22 年 3 月 10 日

編 集 浜松市教育委員会  
発 行 財団法人 浜松市文化振興財団  
印 刷 松本印刷株式会社